

遊びが こどもたちの 未来をつくる

こどもの主体性からの
育ちをつなげる
就学前教育・保育の展開

令和6年度
IV 実践研修 公開保育（研究）・実践検討会



目次

I 研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1 昨年度の研究から・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II 今年度の研究について・・・・・・・・・・・・	3
1 研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	3
2 研究の着眼点・・・・・・・・・・・・・・・・	3
III 研究の方法について・・・・・・・・・・・・	5
1 研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・	5
IV 実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕	8
1 第1ブロック・北部・・・・・・・・・・・・	8
2 第2ブロック・中部・・・・・・・・・・・・	28
3 第3ブロック・南部・・・・・・・・・・・・	44
V 研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・	60
VI 課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・	63



はじめに

令和6年5月31日、こども政策推進会議において、こども大綱に基づき具体的に取り組む施策を「こどもまんなか実行計画2024」として取りまとめられました。こども基本法に基づくこども大綱（令和5年12月22日閣議決定）に示された6つの基本的な方針及び重要事項の下で進めていく、幅広いこども政策の具体的な取組を一元的に示した初めてのアクションプランです。ライフステージ別の重要事項で、「『はじめの100か月の育ちビジョン』を踏まえた取組の推進、幼児教育・保育の質の向上」が掲げられました。

四日市市では、令和7年3月に「四日市市こども計画」を策定し、就学前教育・保育の推進が重点施策に位置づけられました。

四日市市幼児教育センター（以下センターという）では、こどもを権利主体として捉えた就学前教育・保育について、その質の向上に向けて発信し、対話し、振り返りにつながるよう実践研修を実施してきました。

文部科学省において、「遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽” ～ “やってみたい” から始まる学びの芽（知識・技能や思考力等の基礎、学びに向かう力）の育成」とうたわれているように、令和6年度は、遊びのプロセスを語れることを課題としました。公開保育を通し、学び合った一部を紹介します。

センター開設3年目を迎え、四日市市の保育者の皆様をはじめ、地域における連携体制の構築・展開・発展にかかわり、就学前教育・保育の質の向上に向けた、研修・研究・情報発信の活動を進めていきたいと思っています。

令和7年5月

研究紀要

遊びがこどもたちの未来をつくる ～こどもの主体性からの育ちをつなげる～ 就学前教育・保育の展開

I 研究主題について

I 昨年度の研究から

センターでは、昨年度より、「遊びがこどもたちの未来をつくる～こどもの主体性からの育ちをつなげる～就学前教育・保育の展開」との研究主題のもと、研究を進めてきている。

昨年度は「こどもの主体性」と保育者のかかわり、環境について考え、公開保育（研究）実践検討会では、「こどもの主体性」をこどもの姿（活動）から、読み解き、保育者のかかわりや環境の在り方について、様々な意見を交わしてきた。また、就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続の推進について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を通し、検討しあった。

こどもが環境にかかわり主体的に遊んでいく過程で、保育者がこどもの活動に寄り添うことは大切である。特に偶発的に発生することの多い遊びの展開には、受容的、傾聴的なかかわりをし、柔軟に対応していくことや保育者自身も主体的に遊びを楽しんでいるかなどの課題が明らかとなった。さらに、遊びのプロセスが重要であることの助言を受け、こどもの遊びが学びにつながることを明らかにするために、保育者自身がその見方や捉え方について言語化していくことが大事であることを認識した。

引き続き、今年度も「遊びがこどもたちの未来をつくる～こどもの主体性からの育ちをつなげる～就学前教育・保育の展開」を研究主題とし、研究を進めていく。

Ⅱ 今年度の研究について

1 研究の目的

二年次である今年度は、「こどもの姿を3つの資質・能力から捉え、保育者のかかわりや環境構成とどのように関係しているのか検討していく」ことを目的とした。

「遊びのプロセスを語ることをねらいとし、こどもの姿・保育者のかかわり・環境構成においてどのような仕組みが、こどもの主体性を育てるのか」を検討する際に、3つの着眼点を見出した。

2 研究の着眼点

1) こどもの姿・環境・保育者のかかわりから、遊びの展開を読み解く

「人は生まれながらにして、自然に成長していく力と同時に、周囲の環境に対して自ら能動的に働き掛けようとする力を有しており、環境と関わり合う中で、生活に必要な能力や態度等を獲得していくと考えられている。」（今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会・中間報告案より）という、幼児期の発達の特性を踏まえ、保育者との安心できる関係と信頼できる関係のもと、「こどもの体験」と「環境…人やものとのかかわり」に注目し、実践を考えていくようにした。

次に、三重大大学の富田昌平教授からは、公開保育実施園における園内研修において「一人ひとりのこどものアイデンティティをどのように保育の現場で保障していくか、こどもが遊びたい遊びを見つけるまでの時間と遊び始める姿までの過程にこども自身が、どこに所属しているのかという安心感が影響していく。」と、こどもが多様な行動のもとで自発的な姿をあらわし、自己発揮しようとする際に必要な欲求について、重要なポイントをご教示いただいた。

上記の2点から、こどもの姿と保育者のかかわり、環境を通して、遊びを捉えることとした。

2) すこやか・つながり・まなびのめばえの視点でこどもの遊びを考える

昨年に引き続き、「四日市市就学前教育・保育カリキュラム」(※1)のビジョンにうたわれている「すこやか」「つながり」「まなびのめばえ」の3つの視点から、こどもの遊びを検討する。

桜花学園大学の上村晶教授は「ときわ保育園の『つながり』のテーマを通して、『つながり』の定義と共通理解」に言及、『人と人との距離や関係性が分断されたアフターコロナ時代こそ、繋がりを生み出すことが重要」と公開保育実施園における園内研修において助言いただいた。

各公開保育実施園において実践された遊びをもとに討議し、共通理解を図り、「すこやか」「つながり」「まなびのめばえ」の3つの視点から就学前教育・保育の内容を読み解き、「四日市市就学前教育・保育カリキュラム」に反映し、四日市市の就学前教育・保育施設における活用の手引きとなるよう検討していくこととした。

3) 3つの資質・能力から遊びのプロセスを考える

公開保育実施園における園内研修において、岐阜聖徳学園大学の西川正晃教授からは「保育の質を高めるには、それぞれの施設の風土が大事である。遊びの世界が広がる空間を大事にし、この遊びだったら、どうしていこうと考える保育者のワクワク感を大切にしてほしい。遊びを高める指導や援助を通し、遊びが発展し10の姿が現れる。」と助言いただいた。

その姿は、小学校での資質・能力につながる重要な土台であり、小学校に入ってから継続的に育っていくものである。そこで、就学前教育・保育で育まれた姿を小学校教育との連携や接続において、学びの連続性として見通すために、3つの資質・能力から遊びのプロセスを考えることとした。

保育者一人ひとりがこどもの「やってみたい」活動のプロセスを語ることができるように、3つの資質・能力の視点からこどもの姿や遊びを分析し、環境や保育者のかかわりがこどもの遊びをどう支えていたのか振り返り、遊びの発展を考えていくことができるようにした。

Ⅲ 研究の方法について

Ⅰ 研究の方法

施設類型を超え、保育を実践交流する意図を踏まえ、公開保育を行い実践を検討しあえるようにする。

公開保育実施園ごとに、「四日市市就学前教育・保育カリキュラム」の「すこやか」「つながり」「まなびのめばえ」の3つの視点の一つに焦点を当て、担当アドバイザーや実践検討会司会者が年度当初より、研修テーマに添って、園訪問を行い園内研修に携わっていった。また、担当講師が年間2回園訪問を行い助言指導を受けながら、公開を実施した。

公開にあたって、同一形式の事前資料(A)を公開保育(研究)参加者に周知し、公開後、アンケート回答(選択式)(B)で、実践検討会前に参加者のより関心の高かったこどもの活動を絞り、その活動を通して、3つの資質・能力につながるこどもの活動について、ワークショップを行い参加者一人ひとりが保育のプロセスを掴めるようにした。公開保育(研究)で観察したこどもの姿を通して、育ちのプロセスを理解し、明日からの教育・保育につながる実践のヒントになる具体的な内容を出しあい、明日の具体的な援助を前向きに考え学びあえることをめざすこととした。

1) 実践研修 公開保育(研究)の方法

保育を参観し、参観後にアンケート回答を行う。

2) 実践研修 実践検討会の方法

各ブロック参加者のアンケート回答を集計し、アンケートの上位の注目したこどもの活動ごとにグループを組み、グループワークを実施。代表グループが全体会で発表する。

グループワークのポイント

- ①こどもの姿(経験していること、遊び)・保育者とのかかわり・環境について確認する。

自分が注目した活動のアンケート項目に沿った具体的なこどもの姿を、それに関連した保育者のかかわりや環境について出し合う。

- ②育みたい資質・能力へのつながりを確認する(遊びの充実)

遊びの姿から育まれつつある資質・能力は何か、その姿に対し、どのような援助や環境構成をしていたか。また、資質・能力が一体的に育まれるプロセスで大切にしたいことは何かを明らかにしていく。

③明日からの遊びの充実に向けての検討

遊びが充実するために、「遊びの場づくり」「遊びに必要な物」「こどもの姿に応じた保育者の援助」について検討する。遊びの予測を立て、環境の再構築を出しあう。

④四日市市就学前教育・保育カリキュラムの3つの視点からこどもの姿を捉える。

公開実施園ごとに「すこやか」（楠こども園）「つながり」（ときわ保育園）「まなびのめばえ」（富田こども園）の視点で、各園が何を大事にしてきたかを明らかにし、実践から学ぶ。

⑤小学校とのつながりを検討する

遊びが充実することで、こどもに育つ姿を出しあい、3つの資質・能力との関連を考えあい、学びを小学校以降の教育へつなげていく話しあいをする。

(A) 事前資料形式 公開保育実施園作成

様式① 指導計画案

様式① 指導計画案

○〇歳児 ○〇組 名 担任

◎本日の主なねらい・・・

予想される幼児の姿と保育者の援助（◇予想される幼児の活動 ◎保育者の援助（☆環境構成への配慮を含む））

- (B) 当日公開参加者は、QRコードを読み取り、
以下のアンケート内容に回答。

- 1 名前
- 2 所属
- 3 園名・施設名
- 4 経験年数
- 5 あなたが注目した活動（2つ以上）
- 6 5について、注目した理由（それぞれの遊びについて選択）

①こどもの姿から（複数回答）

- ☐ 自分の思いを伝える、他の子の気持ちに気付く姿
- ☐ 意欲的に遊んでいる姿
- ☐ 様々な考え方（科学、数量等）を用いている姿
- ☐ 発見したり、気づいたりしている姿
- ☐ 試行錯誤している姿
- ☐ エ夫している姿
- ☐ その他

②環境について（複数回答）

- ☐ こどもが興味・関心を持てる環境
- ☐ 多様な素材や教材が自由に選べる環境
- ☐ 様々な物事を考え、情報を得ることができる環境
- ☐ こどもの好奇心が芽生える環境構成
- ☐ こどもの探究心をくすぐる環境
- ☐ その他

③保育者の関わりから（複数回答）

- ☐ こどもの気持ちを受け止めるかかわり
- ☐ こどもの気持ちを代弁するかかわり
- ☐ こどもの気持ちに共感するかかわり
- ☐ こどもに提案するかかわり
- ☐ こどもの遊びの仲間としての存在
- ☐ こども同士をつなげる
- ☐ その他

Ⅳ 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

Ⅰ 第Ⅰブロック・北部 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

様々なことに関心をもち、遊びを
楽しむことで、好奇心や探究心、学
びへの基盤を育む。



遊びを豊かにする環境構成と保育者のかかわりについて、こどもの学びから、園内で実践を話しあう。参加者の実践も交えながら、主体的・対話的な学びについて意見交流する。

1) 公開保育(研究)

(1)

富田こども園概要

四日市市立富田こども園

四日市市富田二丁目12-9

059-365-1503

クラス編成

歳 児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
クラス名	きんぎょ	ひよこ	うさぎ	ぺんぎん	きりん	
在籍児数	11	14	20	23	24	92

教育・保育目標	遊びや生活を通して子どもの主体性を大切にしながら 生きる力・共に生きる力を育てる ～自分大好き！友だち大好き！みんなでつながろう！～
めざす子どもの姿	・のびのびと意欲的に遊ぶ子ども ・自分で考えて行動できる子ども ・人とのかかわりを楽しむ子ども
めざす園の姿	・のびのび じっくり みんなで育ち合う園 ・互いに認め合い、安心して過ごせる園 ・保護者・地域に信頼される園
園内研修主題	主体的な遊びを通して、考えたり、工夫したりしながら 夢中になって遊ぶ子どもを育てる
重点目標	1. 思考力、芽生えを育むために 2. 豊かな心とたくましい体を育むために 3. 共に輝く子どもを育むために 4. 家庭・地域との連携・協働を推進するために 5. 職員の資質向上のために

(2) 公開保育（研究）実践検討会 までの経過

3つの視点である「まなびのめばえ」を基に、こどもたちのやってみたい遊びが尊重されるための、園全体での環境構成や保育者の援助を振り返り、幼児教育アドバイザー園訪問およびスーパーバイザー訪問園内研修を重ね、検討してきた。スーパーバイザーである岐阜聖徳学園大学教授西川正晃先生より、「遊びを発展させるために」という視点から提案を受け、園として具体化し、実践していった。

5月～6月 幼児教育アドバイザー園訪問

4歳児のままごと遊びの様子



4歳児の腕輪づくりの様子



5歳児の泥だんごづくりの様子



5歳児のケーキ屋さんごっこの様子



8月～9月 スーパーバイザー訪問 園内研修での助言から

一つの遊びが長期に継続し、遊びが深まっていくためには遊びの痕跡を残しておくことが大事である。こどもがリアリティや本物を求め、遊びが巧みに発展していく。遊びの変化と発展は違う。どのように遊びを残していくのか、職員で考えあい、ぜひ遊びを残していくことを工夫していったほしいと思う。繰り返し遊び続けることで、10の姿が育っていく。主体性を育てることにつながっている。

また、保育者はこどもと一緒に保育を作る主体者である。保育者の主体性がないとこどもの主体性が生まれない。保育者はこどもと一緒に生活や遊びを作る人であって、保育をマネジメントする人ではない。お互いが主体性を発揮して、遊びを楽しんでほしい。遊びを高める指導や援助が大事である。保育者がこどもにどのような言葉をかけるか保育者自身が遊びが面白くなるように工夫してほしい。

園の取組み

こどもの「もっと遊びたい」「続きがしたい」という思いを汲み取り、遊びの続きができる環境を再構築し、保育者間で共有していった。また、園庭と室内の遊びの環境を見直し、こども自らが遊び、様々な遊びに挑戦できるようにしていった。保育者自身がこどもと遊びを楽しむための考えをこどもに提案したり、遊びが始まるためのきっかけを考え、環境を整えていった。

研究紀要

(3)

公開日当日の保育

「ハンバーガー屋さん」4歳児

遊びの経過

折り紙・包装紙・空き箱・ダンボールなどの様々な素材を使い、作ったり、一人ひとりのこどもの生活体験からお店屋になって遊んだりする姿があった。夏頃は、回転寿司ごっこをしたり、うどん屋ごっこをしたりし、遊びが変化していった。こどもが「〇〇をしたい」と思ったときに「一緒にやってみようか」と言葉をかけたり、「〇〇がしたいのかな」とこどものやってみようと思う遊びを探り、環境を整えていくようにしてきた。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

昨日も、ハンバーガー屋さんごっこを楽しみ、「今日も・・・」という思いをもちながら、こどもたちと保育者が相談しながら店の準備を一緒に行う。5歳児のケーキ屋さんが開店すると関心をもち「ちょっと行ってくるわ」と買い物に出かけるこどももいる。新たに店員をやりたいと準備をする子もいたが、少なくなったので、保育者が店屋になり、「チーズバーガー、チーズ大盛りサービスね」「ポテトは、いりませんか」と声をかけ「お客さんがいっぱいになってきたから、だれか手伝ってほしいな」と小さな声でつぶやく。すると、「ぼくも一緒にやろうかな」とちょうど外から戻ってきたこどもたちが加わり、ハンバーガー屋さんが始まった。「いらっしやいませ」と声を出し、店員になりきる姿に合わせ、保育者が「〇〇さん、シェイクの作り方、これでいいの?」「ポテトリーダーの△△さんに、ポテトお願いしてもいいかな」など話しかけ、こどもたち中心に店屋が始まりだした。注文を受けると、ジュース作り、ハンバーガー作り、ポテト作りなど役割を分担していた。

客の子は、番号札を受け取り、店員と「今、3番のを作っているよ」「待ってるね」「2番の方、お待たせしました」「ありがとう」とやり取りしていた。また、ジュースを頼む場面では、「グレープ炭酸抜きで」「3つまぜまぜにして」「どんな味かな」と表現し、イメージを共有しながら、それぞれの役になりきり遊んでいた。保育者は店屋のやり取りを見計らい、客になって行くと、店員の子が「ナゲットサービスするわ」と声をかけていた。また、一旦はハンバーガーセットのおもちゃを客の保育者に渡しながら、「先生がもっともっと喜ぶおもちゃを作ってくる」と製作コーナーに行き、折り紙でおもちゃを作り始めていた。5歳児のケーキ屋さんで客の経験をしてきた子が戻ってきてハンバーガー屋さんの客になった。すると「私たちお金払ってないよ」とお金と品物を交換していないことに自分で気付いた。一緒にケーキ屋さんに行った保育者も、こどもの気付きに「ほんとだね。そういえば、ケーキ屋さんでは、お金を払ったよね」と受け止めると、「お金、作るわ」とお金を作りに製作コーナーへ行った。自分で気づいたことをやってみようとする姿があった。



研究紀要

公開日当日の保育

「ケーキ屋さん」5歳児

遊びの経過

絵の具、紙粘土、ボンド、自然物などの様々な素材を使い、今まで繰り返し、こども自身がイメージした物を作ったり、作った物を使って遊んだりしてきた。その過程で、地域の文化祭にこどもたちが作ったケーキを作品として展示した。ケーキ作りも、一段と工夫し、経験を出しあい、ケーキ屋ごっこへ遊びが発展していった。こども一人ひとりの興味・関心にあわせ、ケーキ屋の役割の何を担いたいか話しあい、こどもとともに、環境を作り替え、遊びを楽しんでいる。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

一年を通して、スイーツ作りを経験し、ケーキ屋さんごっこを繰り返し楽しんできた。

文化祭でケーキを作り出品したことで、こどもたちから、「もっと本物みたいなケーキが作りたい」「作ったケーキをどうしよう」「ケーキ屋さんをしよう」「小さい子も買いにきてくれるかな」「ケーキ屋さんって、食べる場所もあるよ」など、次々とアイデアが浮かんできた。ケーキ屋さんの遊びを通して、それぞれのこどもたちが、やってみたいが実現できるように環境を整えていった。

ケーキ屋さんのレジは、人が並ぶのに目印がいることに気付いた子が、足型の紙を床に貼るのに苦労していた。テープを1か所止めただけでは、すぐにはがれてくるため試行錯誤し、2か所止めればよいことに気付いた。ケーキを飾るケースを準備したことで、こどものイメージも明確になり、ケーキを飾って売ることやお店のやり取りを友だちと共有する姿があった。

ケーキ作りに、熱中する子もいて、今までの物づくりの経験から、細部のこだわり、ボンドの量の加減や素材選びなど一人ひとりが個性豊かにやりたいことを試していた。クリームを絞ってケーキを飾る道具があることで、こども同士が「生クリームものせる」と出来上がってきたケーキを見て、言葉を掛けあっていた。保育者は、こどもたちのイメージが広がるよう素材や道具を準備しながら、こどもの遊びに応じて、作る場所を広げたり、カフェのテーブルの場所を広げたり、こどもに提案しながら環境を再構成していった。

年下の子が次々と保育者と共にケーキを買いに来ると、こども同士で役割分担を相談し、レジ係、オープン担当、ケーキ作りなどに分かれた。その役割の中で、こどもの戸惑いやどうしようか悩んでいる姿に寄り添い、「おしぼり渡す?」「お盆が足りないのか、どうしようか」など提案したり、一緒に考えたりすることで、こども自身が「こうしよう」と思ったことを遊びの中で実現していった。



研究紀要

公開日当日の保育

「泥だんごづくり」5歳児

遊びの経過

毎日、園庭に出て、泥だんごを作るこどもたち。「今日は、昨日よりもっと硬いだんごを作る」「さら砂をかけて、ピカピカにする」など興味・関心のあるこども同士の中で、一人ひとりが目標をもち、その目標に向かってやり遂げたいと夢中でだんごづくりをしている。春にこどもの興味・関心にあわせ、「泥だんごの作り方」のポスターを張り出したところに比べ、一段と力が入ってきている。こどもの工夫や考えていることを受け止め、保育者もこどもの目標が達成できるようかわってきた。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

昨日の遊びの続きを始めるこどもたち。泥だんごづくりが何日も続き、園内のどこの砂で何をすればよいかこどもなりに情報を整理し、だんごを進化させようとしている。「築山のだんごは固くなる。砂場で作るとだんごはできるけど、すぐに壊れるん」などと話していた。磨いたり比べたりできるように、作った泥団子や磨く布などが取り出しやすく置かれ、そこにピカピカの泥団子の写真が掲示されていた。今、こどもたちの最大の興味・関心はどうしたら、写真にあるようなピカピカのだんごが作れるようになるかである。ピカピカの泥団子の写真を見ながら、今まで以上に目当てを持ち、友だち同士で刺激し合っていた。

ピカピカにするためにはさら砂がたくさん必要であることに気付いたのか何人かの子はふるいでさら砂づくりに熱中していた。また、作ったさら砂をバケツに入れて運び、大きなケースに友だちと協力して、たくさん集めていた。途中で、さら砂の中に石が入っていることに気付いた子が「石が入っているよ」と教えたりしていた。

保育者は室内の遊びにかかわり、テラスからこどもたちの様子を見守っていた。その後、築山に行き、一緒に泥だんごを作りながら、こどもたちの会話に耳を傾けていた。

そして、「さら砂いっぱいになったね」「〇〇さんのだんご光ってきた?」「〇〇さんのだんごって、大きいんだよね」「一回、写真と比べてみる」などと言葉をかけていった。こどもたちもそばに友だちや保育者がいることで安心感をもち、じっくりだんごづくりに没頭していった。その後も試したり、工夫したりできる時間がたっぷりとあり、好奇心を継続させながら、感触や性質などに気付き、友だちと伝えあう姿が見られた。

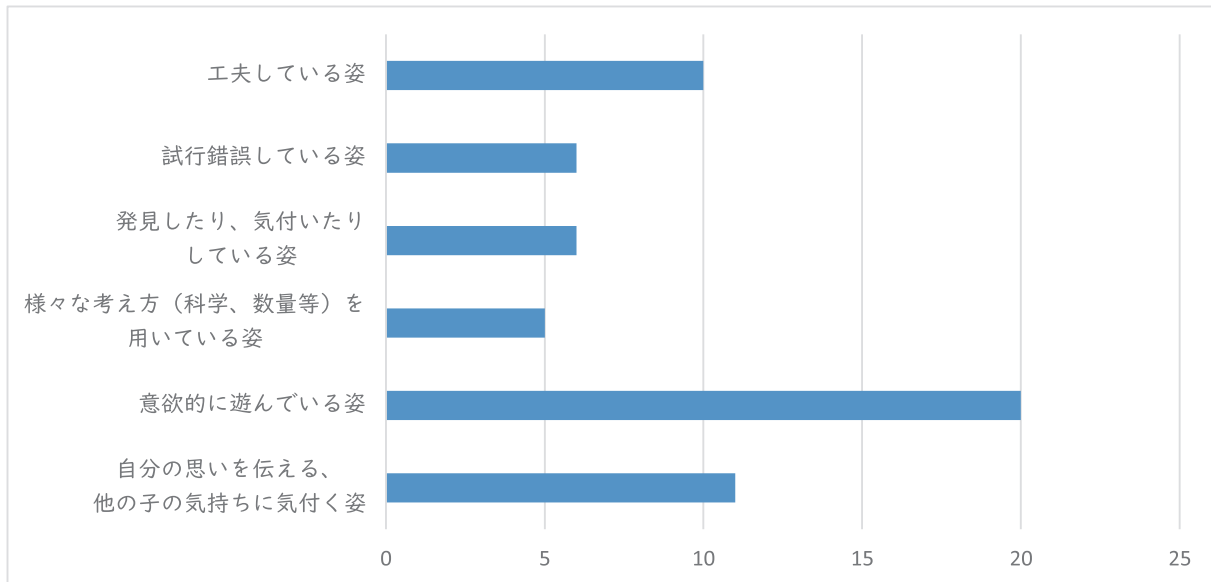


研究紀要

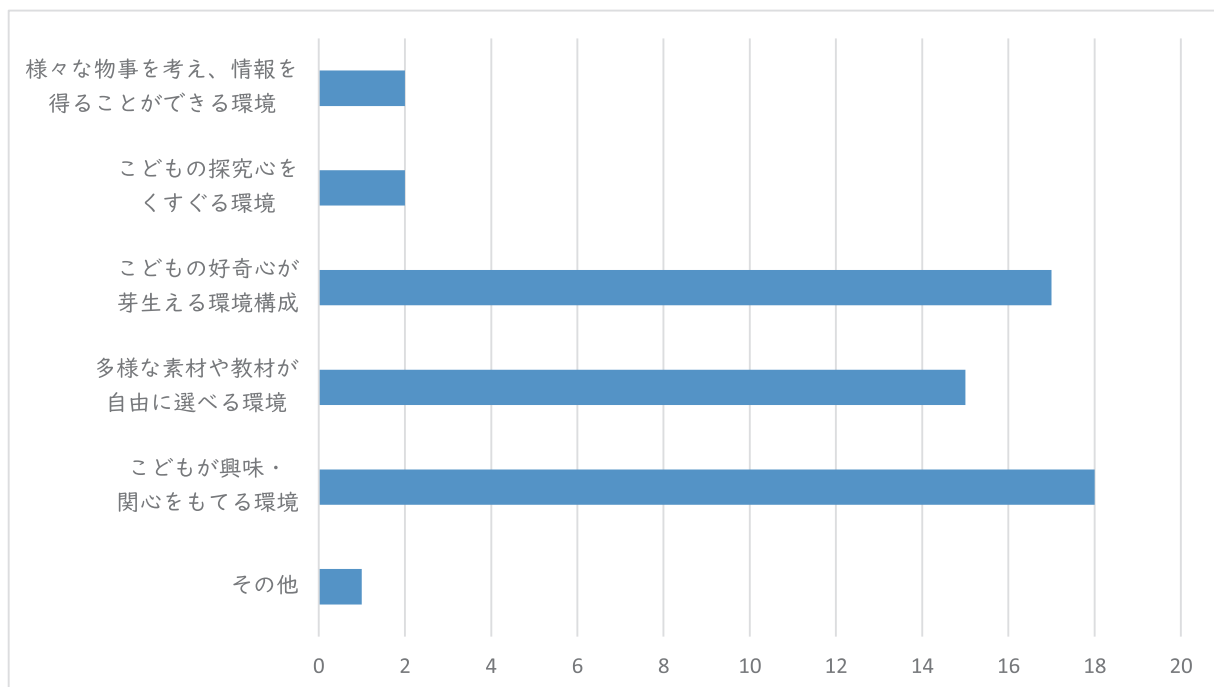
(4) 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

「ハンバーガー屋さん」 4 歳児

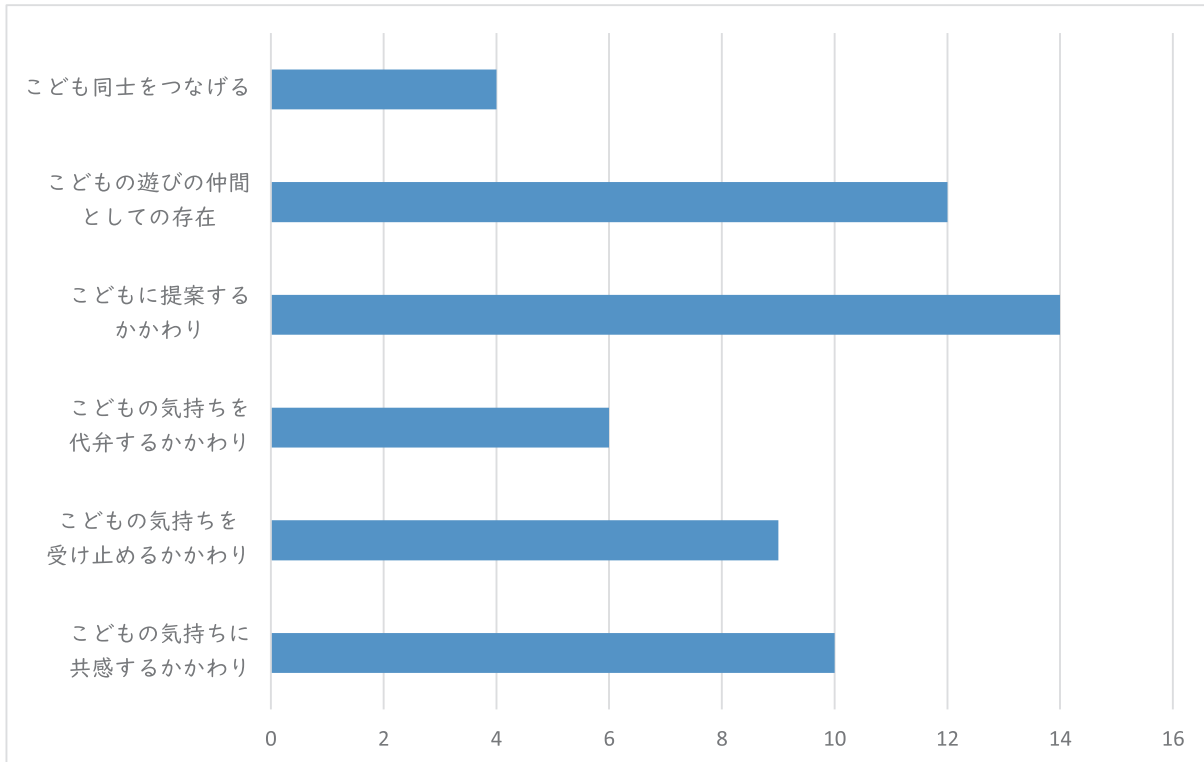
① こどもの姿から



② 環境について

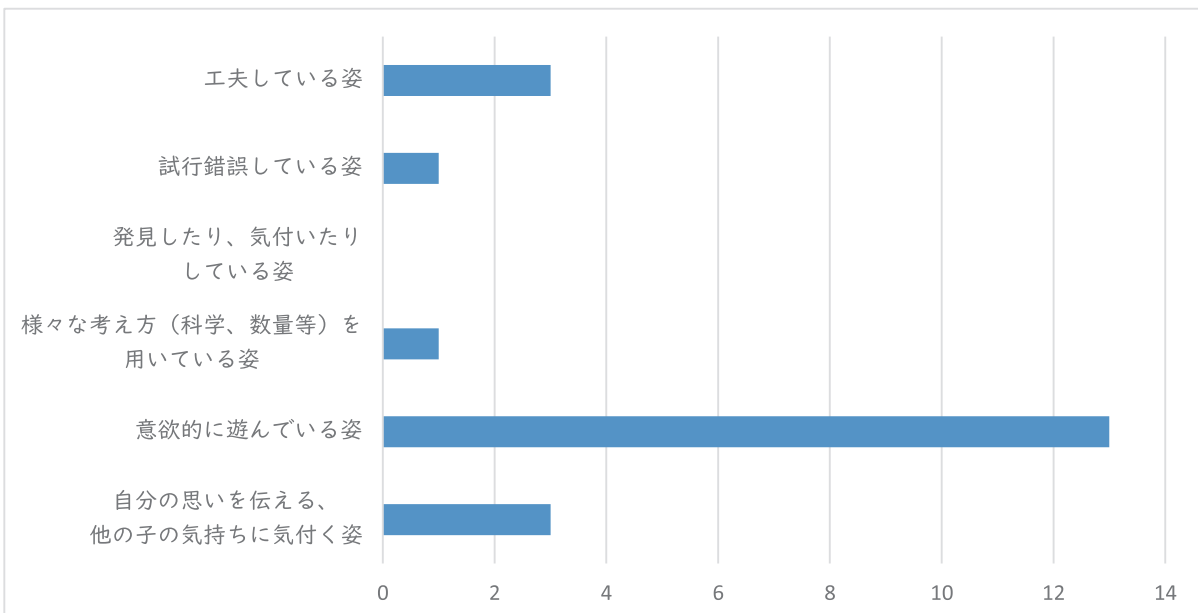


③ 保育者のかかわりから

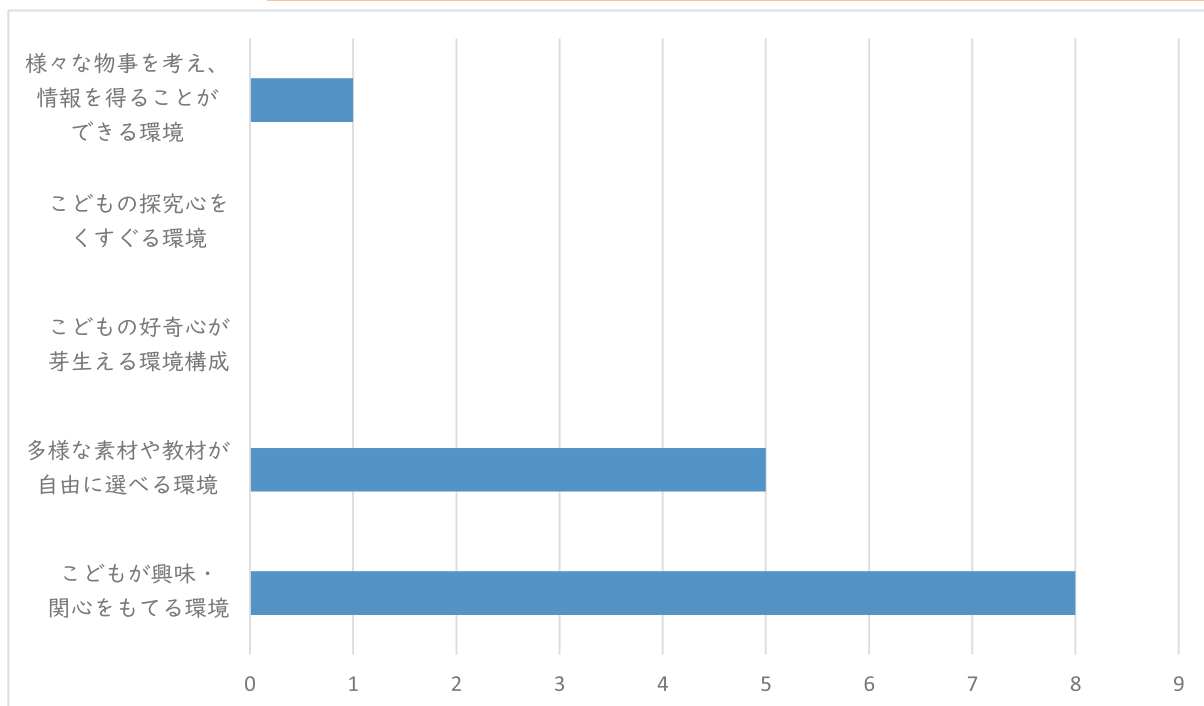


「ケーキ屋さん」5歳児

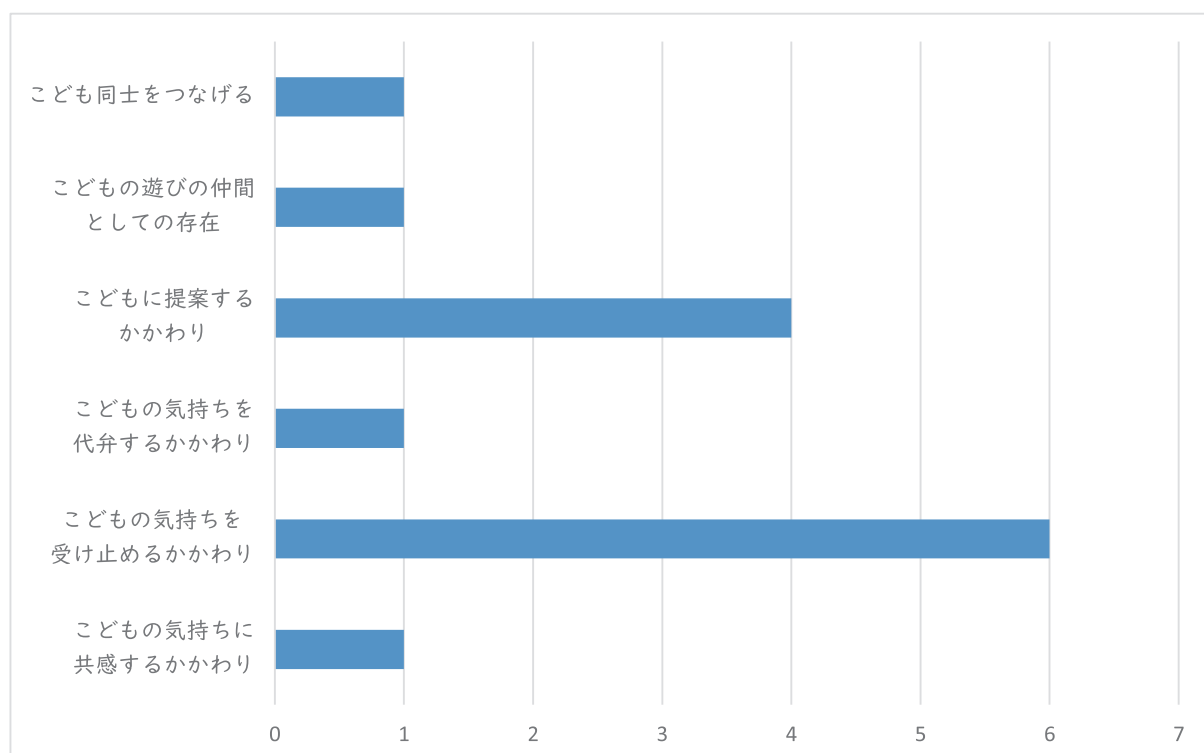
① こどもの姿から



② 環境について

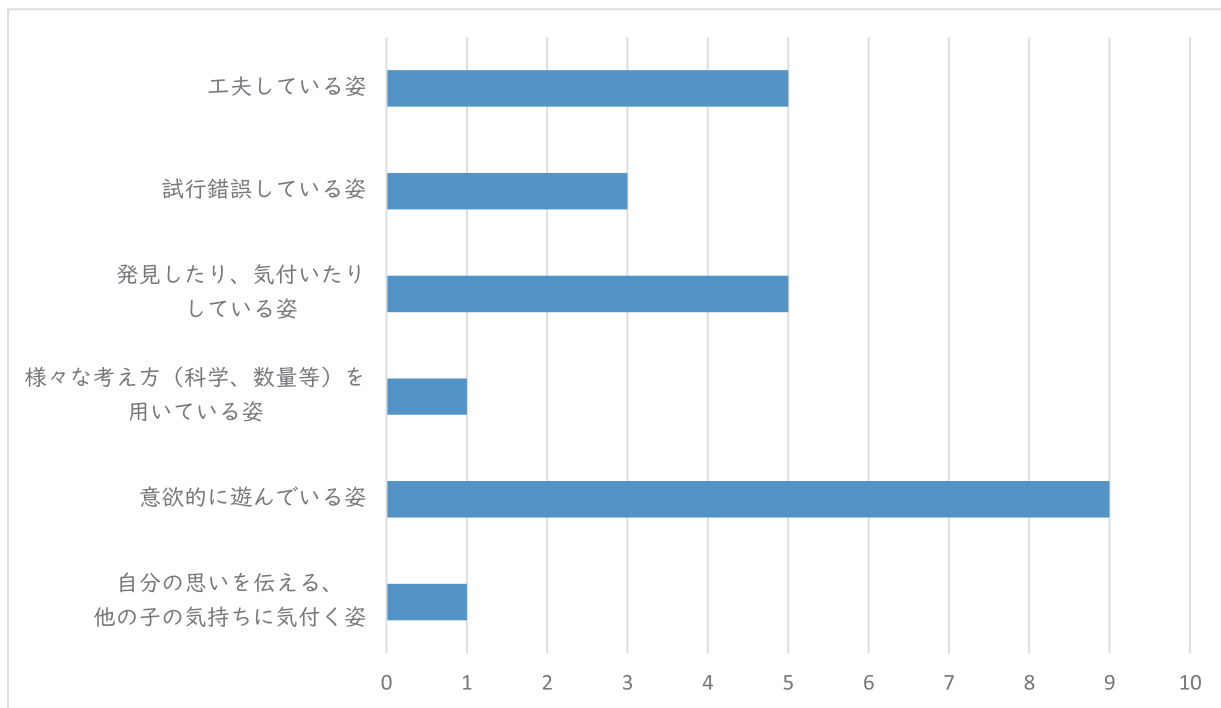


③ 保育者のかかわりから

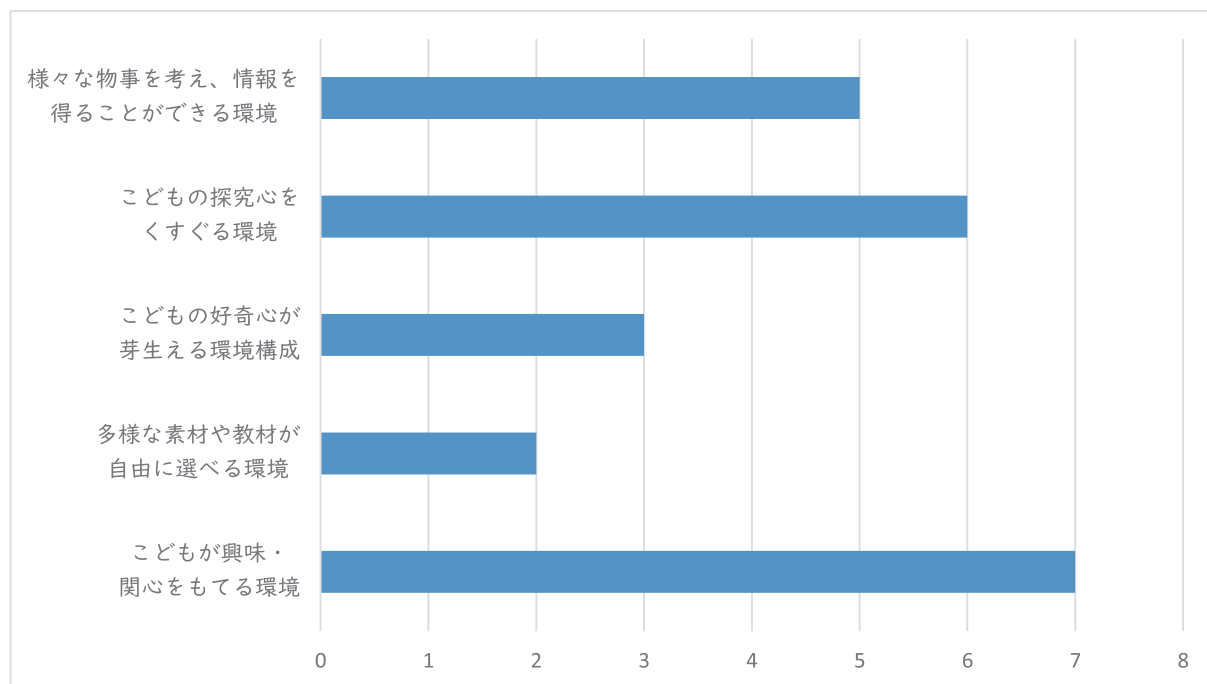


「泥だんごづくり」 5 歳児

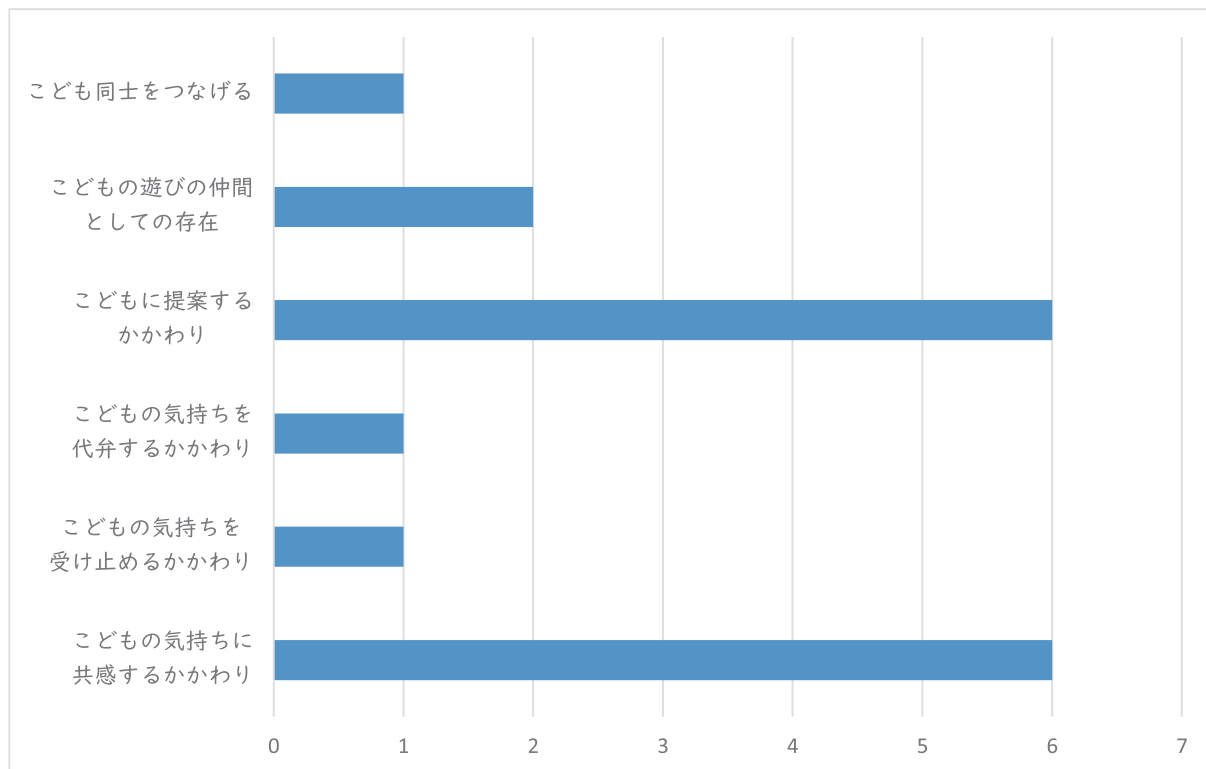
① こどもの姿から



② 環境について



③ 保育者のかかわりから



2)実践検討会

(1) グループワークで討議したこと

「ハンバーガー屋さん」4歳児

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・ハンバーガーの具材をもってきたり、看板を立てたりして店の準備をし、ポテトを揚げる、お金を作る、おもちゃを作るなどそれぞれのこどもが遊びを選び、やりたいことをしていた。 ・注文したものがなかなか届かないと怒っている子に気づき、保育者に助けを求めている。 ・外で遊んでいた子が、テラスでハンバーガーを食べている子の様子を見たり、隣のケーキ屋さんでケーキを買っている子の姿を見て、やってみたいと遊びに入ってきていた。	・風が吹いて店の看板が倒れそうになるのに気づき、こども同士で、「どうする」「こうする」「持っておく」「また直す」と考え、工夫していた。 ・店屋の掛け声や客とのやり取り、注文などをこども同士で工夫してしていた。 ・ままごとコーナーにあるトレイを自分で取りに行き、そこにジュース・ポテト・ハンバーガーを順番にのせて、完成させていた。	・「いち（1）ってこう書くんだよ」「これ（001）なあに」「100だよ」お金を作りながら、数字について気付いたことをやりとりしている。 ・財布を作る、お金を作るなど店屋に行くために必要な準備に気づき、こども自身で作っていた。 ・ポテトは揚げる真似をしてから、袋詰めしていた。（ポテトが揚げ物であることや出来立てを売ることなどを知っている）

② 保育者のかかわりと環境について

こどもたちの遊びの姿から、店屋に興味をもっていることを感じ、保育者はこどもたちがイメージしやすい品物を準備し設定することで、保育者や友だちと遊び始めていく子が徐々に増えていった。

この日の遊び始めは、店屋にこどもたちが少なかったため、保育者が店屋になり、店ごっこのきっかけを作り、「誰か手伝ってほしいな」とつぶやき言葉を発することで、こどもたちのやってみたいという気持ちを引き出していた。遊び始めると、こどもたち自身が今まで経験したことを活かし、店屋の環境を整えたり、品物を準備したりし始めた。遊びに必要な体験になるよう、遊びの足場架けをどのように仕組んでいくかが大事なことでないだろうか。

遊びが発展するために保育者が、こどもと共に5歳児のケーキ屋に買い物に行ったり、店屋に客が来なくなったのを見て、客になったりしていた。こどもと一緒に遊びを楽しむ保育者のかかわりが、もっとこの遊びをしたいというこどもの意欲（学びに向かう力、人間性等）につながっていったと考えられる。また、「頼んだものをすぐに作ってくれない」など遊びの中で生じる葛藤を保育者の手助けを受けながら、気持ちの折りあいをつけていた。年度当初より築いてきたこどもの保育者に寄せる安心できる関係性の存在を感じた。その関係性のもと、こどもたちは、いろいろなことを考え、品物を売ったり買ったりするために必要なお金に気づき、オリジナルのお金を作ることで、数字を知り、友だちとコミュニケーションを取り確認していた（知識及び技能の基礎）。遊びを楽しむために、自分の生活体験を活かし工夫していた（思考力、判断力、表現力の基礎）。

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「わくわくハッピーセット こどもが主体で意欲的」

「やってみたいから生まれるまなびのめばえ」

「遊びから学びの芽が出る 体験から遊びに」

④ 「まなびのめばえ」について

こどもたちの遊びたい気持ちに保育者が寄り添い、環境を整えることで、こどもたち自らやりたいことを考え、試し、気付いていた。その気づきを保育者や友だちと共有し会話を楽しむ姿や、保育者が仲介し、やり取りを楽しむ姿があった。



「ケーキ屋さん」5歳児

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・製作コーナーでは、こども自身がイメージするケーキに近づけようと素材を選択し作っていた。また、友だちの出来上がってきたケーキを見て、自分が使っていたホイップクリームを使わないか気にかけて言葉をかける子がいた。 ・ボンドがうまくくっつかず、いらいらしている友だちに対して、「10秒待つといいよ」と声をかけていた。ケーキ作りに集中し、没頭している姿があった。 ・ケーキ屋さんでは意欲的に年下の子の客に声をかけたり、気遣ったりしていた。 ・年下の子の客が自分が作ったケーキを選んだのを見てうれしそうにしていた。	・ケーキ作りでは、素材の中から毛糸を選び、数種類の色を組みあわせることを思いつき、色を交互にし貼り付けていた。ホイップクリームを強く絞ってしまい袋が破れ、袋が破れることやどう絞ればよいか絞り方に気づいた。 ・客が並ぶ場所が分かるように足型の紙を貼るのに、何度も繰り返し、テープをどう貼ればよいか工夫していた。 ・客が増えてきたのに気づき、「並んでください」「一人ずつ注文を聞くからね」と分かりやすく伝えていた。 ・年下の子の客が来た時に使えるようにお金を作って準備していた。	・ケーキ屋さんを始めるには、友だち同士で、役割分担することや、どの役になるか相談したほうがいいと知っている。 ・ケーキ屋では、レジを使い会計をしたり、作ったケーキをショーケースに並べたりし、ケーキ屋に必要な物を知っている。 ・カフェを利用してケーキを食べる子へスプーンがいることやケーキを運ぶのにトレーが必要だと気づき、準備していた。 ・ボンドは10秒ぐらいで乾いて、物と物がくっつくことを知っていて、友だちに教え、くっつくまで押さえておくことを伝えていた。

② 保育者のかかわりと環境について

今までの経験を活かし、こどもたちのこんな風にケーキを作りたい、今まで作ってきたケーキより、より本物に近づけたいという思いが達成できるように素材や道具を用意した。ケーキ屋さんごっこのために準備を進めようとするこどもたちの仲間として、保育者も一緒にケーキ作りを始めた。ホイップクリームに似せた素材を準備すると、渦巻くようにクリームを飾るために絞り出す力加減によって、袋が破けることを経験した子がいた。その子は自分なりに力を入れすぎたことに気付いたようだが、他の子も戸惑っているのが分かった。保育者は、クリームを絞る力の入れ方を「優しい力で」と表現し、こどもなりに絞り方を考えられるように話しかけた。様子を見てみると、「優しい力」を自分なりに考え、強く絞ると破れてしまうことがあることも理解し試していた。

ショーケースやレジなどの本物の店屋のように環境を整えたことで、こどもたちのイメージも広がり、ケーキ屋さんごっこをどのように進めるか、こどもたち同士で考えを出しあい、教えあったり、相談していた。客に来てもらいたいと思い、年下の子のクラスに呼びに行く子がいた（学びに向かう力、人間性等）。年下の子がケーキを選ぶ姿に嬉しくなり、より本物に近づけたいとの思いが高まった。自然物やホイップ状素材や接着に使う用具等を十分に準備したことで、ケーキ作りを工夫したい、友だちの考えを取り入れて作ってみようなどいろいろなことを試そうとする姿があった（思考力、判断力、表現力等の基礎）。ケーキさんの活動を通して道具を使ったり、本物の店屋のように環境を整えたことで、いろいろなことを知っていく姿や、自分が分かったことを友だちや年下の子に伝える姿が見られ（知識及び技能の基礎）、もっと遊びを充実させたいという思いにつながっていったと考えられる。

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「ケーキづくりに夢中!!」

「分かりやすい やってみたい 本物に近づきたい」

④ 「まなびのめばえ」について

こどもたちの作りたい気持ちを触発する魅力的な環境がこどもたちに工夫や考えてみよう、試してみようとする「まなびのめばえ」を育てていっている。やってみたいことをとことん没頭してできる環境があった。保育者は、こども自身がどうしようかと考えられるような提案、「本物は○○だね」といった意見などを仲間の一人として伝えていた。



「泥だんごづくり」5歳児

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・だんごを作っている途中で崩れてしまった友だちに「大丈夫、ぼくのせい」と気にかけ「ちがうよ」と答え、もう一度泥だんごを作り直し始めた。 「大丈夫、直るから」とつぶやきながら、一生懸命作っていたがなかなか元通りにはならず、じっと見つめていた。築山に移動し、土をたくさん抱えて戻ってきた友だちを見て、ほっとしている。その後もだんごの形を戻すのにその場で二人で黙々と作り続けていた。 ・泥だんごに使うさら砂を作った、バケツに入れて築山に運んできた。泥だんごを作っている友だちに伝えると、友だちが石が入っていることを伝え、それに応じて、石を取り除こうと一旦その場でさら砂を出していた。それを見て、友だちが「めっちゃきれい」と使い始めた。 ・5歳児の泥だんごに興味・関心をもち、置いてある泥だんごを触ろうとする年下の子がいた。	・泥だんごをピカピカにするためにはさら砂がたくさん必要なのが分かり、さら砂を作ろうとふるいを探しに来た。が、友だちが使っていて、使えずにどうしようか考えていた。保育者に相談し、友だちにどのように自分の気持ちを伝えればよいのか考え、自分で問題を解決しようとふるいを使っている友だちに話しかけ、お互いに折りあいをつけようとしていた。 ・泥だんごを作る工程を写真で示したポスターを見ながら、確認し、友だちに「次は〇〇だよ」と知らせながら、自分たちで、泥だんごをどのように作り上げていけばよいか方法を考え、相談し、作っていた。	・泥だんごをピカピカにするためにはさら砂がたくさん必要。 ・泥団子に使うさら砂を作った、バケツに入れて築山に運んできた。「石が入っているよ」と言われ、石を取り除こうと、一旦その場でさら砂を出したが、それを友だちが見て、「めっちゃきれい」と使い始めたのを受けて、さら砂がうまくできていたと自信をもち、作り方も分かった。 ・園庭のいろいろな砂や土や泥など使うものによって、泥だんごの出来上がりが違うことを知っていて、「砂場で作るとすぐ壊れる」「ここの砂はだんごが白くなる」「築山で作ると硬くなる」などと言っていた。 ・泥だんごを作り上げるには、いろいろなグッズが必要なことや、何日もかけて作り上げていくことが必要なことを知っているため、泥だんごづくりを終えると、一旦保管する場所があり、大切にそこに置いてあった。

② 保育者のかかわりと環境について

こどもたちが自ら選び、継続して作り続けられることを手助けするための環境を整え、見て考えられるような写真や掲示や自分で調べることのできる図書の設定をされていた。自分たちで友だちと相談したり、考えたり、予測したりし、作り続ける姿が育ってきている（思考力、判断力、表現力等の基礎）。自分が体験し、理解できたことを自分なりの言葉で伝えあい、わからないことは、保育者や友だちと一緒に図書などを利用し調べることで答えが見つかることがあるということを積み上げてきている（知識及び技能の基礎）。泥だんごづくりに集中している友だちに刺激を受け、興味・関心が広がってきている。まわりのこどもたちもピカピカの泥だんごを作りたいと思いが高まっている（学びに向かう力、人間性等）。

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「ひかる だんごづくり」

④ 「まなびのめばえ」について

園庭という物的環境がこどもたちに年間を通して、様々な影響を与え、「まなびのめばえ」を育ててきている。園庭の使い方を園内で会議や研修を重ね、こどもたちのやってみたいが実現できるように振り返ってきた。こども同士で、遊びを繰り返し楽しむことがイメージを共有し、折りあいをつけ、目標をもち達成したいという願いにつながり、その思いが「まなびのめばえ」を育てているのではないか。



(2) 講師助言まとめ 第1ブロック・北部

実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕

講師紹介

岐阜聖徳学園大学教育学部

西川 正晃 教授



公立小学校教員を十数年勤めた後、大学院を経て大学附属幼稚園教員として実践を重ね、大学附属幼稚園副園長、全国幼児教育研究協会県支部長、関西国際大学教育学部准教授、大垣女子短期大学教授・学科長を歴任。保育実践を語る会「土曜の会」の企画や開催
著書『幼児期及び幼保小接続期の
教育の質的向上』 他多数

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」とは

幼稚園教育要領解説の中に、「遊びの中で幼児が発達していく姿を、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる」とある。

十分に遊ぶ中で、これらの姿が育っていく。これらの姿とは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿である。

小学校以降の教育と決定的に違うことがあり、一つ一つの姿を取り出して指導したり、目標にして到達させようとしたりしない。これが、幼児教育の特徴である。

就学までにいっぱい栄養として蓄えたこどもたちに、小学校では、「思考力を高めること」や「言葉による伝え合い」等を意図的に仕掛けながら授業をされている。

幼児教育では、「10の姿」を取り出して鍛えるものではない。5歳児頃になると、こどもは遊びを面白くするために、みんなで遊んだり、考えたりする。だからこそ、保育者のかかわりは、遊び込むことを支えるということであるといえる。上記解説の中には「実際に指導では、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないこと」とある。小学校以降、中学校、高校と、かなり専門的になっていき、それらの力を育てていくのである。

遊べば「10の姿」が育つ、「10の姿」が育っているこどもの姿が主体性である。自分勝手と主体性は違う。遊び込むことで、「10の姿」が育ち、それを小学校ではしっかりとつなぎ、育てていくということである。

研究紀要

「遊びがこどもたちの未来をつくる」から

研究テーマから重ねて考えてみると、まず、こどもたちの未来をつくる遊びがある。安心と挑戦の繰り返しという遊びを通して、10の姿が育つ。10の姿は細かく分けてこどもの姿を捉えているが、大きくまとめると3つの資質・能力（「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」）である。この資質・能力というものをしっかりとこどもたちが蓄えていく。こどもたちが資質・能力をつけるということが、こどもたちの未来をつくるというつながりになっている。

四日市市では「すこやか」「つながり」「まなびのめばえ」というキーワードで表し、「安心」と「挑戦」の遊びの繰り返し、資質・能力を育てていくことを示している。

保育者は、一人ひとりのこどもの気になる姿を取り出し、こどもたち一人ひとりに様々な願いをもつが、それを意識しすぎると保育がぶれることがある。「どうしたら遊びが発展するか」「どうしたら遊びが深まるか」とこどもを追求め、遊び込んでいくことが3つの資質・能力の育ちにつながることを意識してほしい。

本日の公開保育のだんごづくりの例では、こどもが「だんごが作りたい」という姿に向かっていく様子がわかった。学びに向かう力・人間性等の姿が多く見られた。それはなぜか。

「やってみよう」という「まなびのめばえ」が、そして意欲的に遊んでいるという姿が、「興味のエンジン」となって、どんどん遊びを面白くし、遊びが発展することにつながっていくことが伝わってきた場面であった。

「まなびのめばえ」に注目していくのは遊び始めだけではなく、遊びが発展するために、どのようなかわりが必要か、今までの遊びが継続できる場所を作ろうと考える、保育者自身が興味・関心を持ち、もっと遊びが発展するためにどうしたらいいか、保育者自身も参画していこうとする姿が、「まなびのめばえ」という視点からの遊びを発展させていくのである。

「まなびのめばえ」について

ここが幼児教育の肝である。知識、技能と思考力・判断力・表現力は基礎である。基礎であって基礎でないものは、学びに向かう力・人間性等である。幼児教育の間に、こどもたちの中に、こどもの姿としてつけていかなくてはならない。知識・技能の基礎や思考力・判断力・表現力の基礎の姿は、教科学習の中でその栄養を糧にして発揮していく。

繰り返すが、「やってみよう」学びに向かっていく「まなびのめばえ」の興味のエンジンを幼児期に育てていくことが重要である。興味のエンジンが学びの基盤であり、さらに遊びを発展させていくエネルギーになっていく。「まなびのめばえ」というキーワードは大事である。

「やってみたい」という「まなびのめばえ」は、興味のエンジンでもあり、遊び込むというものにも発展していく。「これをもっとこうしよう」「実際に近づけよう」などと、どんどん追求していく。遊びの発展や深まりを支えるのは「まなびのめばえ」である。それらが、資質・能力として育っていく姿につながっていき、その姿は、「10の姿」として具体的に発揮されていくのである。

「やってみたい」の導入として、こどもたちの遊びたい興味のエンジンをフルスロットルで発揮できる、こどもがやりたいことをとことんできる環境が大事である。生活環境によって遊びが制止されることがあると、こども自身の資質・能力が育っていく姿に結びつかなくなる。

安全面を考え規制していることを、こどもの「まなびのめばえ」から考え、改善していく。保育者自身が壁を作り、今までそうしてきたからという意識で終わらせると、こどもの「まなびのめばえ」が育ちにくい。

「遊び込む」という「まなびのめばえ」の興味のエンジンを捉えて、こどもたちが作ってきた場所があり、遊びの過程を残せるように工夫をしていくことが大切である。

遊びの共主体者としての保育者

富田こども園では、「まなびのめばえ」のキーワードを大事にし、保育者一人ひとりが自身に問いながら園内で考え、保育者のかかわりや環境を工夫してきた。

保育者とは見守るだけでなく、遊びが発展する、面白くなるためにかかわっていくことが大事である。遊びが停滞しているときに「考えてみようか」とこどもに聞いてみる。投げかけて終わりではない。こどもの主体性という言葉に囚われて、遊びの発展を止めてしまつては、何のために保育者がいるのかと問われるのである。富田こども園では、こどもと共に保育者も主体性を発揮して遊びを進めていこうとする取組が展開されていた。

遊びの共同者として、遊びが発展していくことを考え、遊びの発展を支えていく。共主体の立場でかかわっていくことを大事にしてほしい。

こどもの「やってみたい」という興味のエンジン「まなびのめばえ」を大切にし、遊びを発展、深めていくことを通して、資質・能力を育てていこうとすることを理解する本日の公開保育（研究）実践検討会でのワークであった。

こどもたちにいろいろな力をつけたいと願うのであれば、「遊びが発展する」ことを考えてほしい。

IV 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

2 第2ブロック・中部 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

友だちと一緒に遊び、いろいろな
気持ちを共有し、人とかかわること
の心地よさを味わう。



思いを伝えたり、聞こうとしたりするこどもの心の育ちを丁寧に追いながら、保育者のかかわりについて学びあう。保育者とこどもが共に生活を営み、考え、学び、主体性の育ちにつなげていく。「共主体」について、実践から考えあおう。

1) 公開保育(研究)

(1)

ときわ保育園概要

四日市市立ときわ保育園

四日市市ときわ5丁目1-12

059-352-8363

クラス編成

歳 児	0歳児	1歳児	2歳児	2歳児	3歳児	3歳児	4歳児	4歳児	5歳児	5歳児	合計
クラス名	きんぎょ	ひよこ	あひる	りす	うさぎ	ぞう	くま	ぺんぎん	きりん	らいおん	
在籍児数	6	14	13	13	20	18	21	19	20	20	164

教育・保育目標	○一人一人の生命を守り、園の中で愛されているという感覚を味わうことができるよう一人一人の違いを大事にします。 ○一人一人の子どもと保護者に生きる力を感じてもらえるよう子どもの発達を見つめ、共に気づき共感し合える関係を大事にします。
めざす子どもの姿	・自分を大事にして、人も大事にする子ども ・しなやかな心とからだを持ち、友だちとかかわり遊べる子ども ・互いの違いに気づき、認め合い、差別をなくしていける子ども
めざす園の姿	十分に保障された遊びの中で、習慣を身につけ、学び、自己決定できる主体性を育てます。
園内研修主題	つながろう ～わたしがすき あなたがすき ともだちがすき～
重点目標	◎子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を 培うことを大切にします。 【健康な心と体】からだづくり…心身ともに健康なからだづくりをする。 生活習慣の確立…集団生活を軸にして基本的生活習慣の育成をはかる。 【人とかかわり】なかまづくり…人とかかわりを快いと感じ仲間とかかわる力をもつ。 【思考力の基礎(環境)】確かな学力…自然や社会の中で思考力・想像力を身につける。 【言葉の理解】コミュニケーション力…言葉への興味関心を育て、理解を深める。 【表現力】豊かな感性・自尊心…生活体験を大切にし、豊かな感情・創造性を育てる。 保育園生活において、一人一人の子どもが快適に安心した生活を送り、自分の居場所を見つけ自分の気持ちを表すことができるよう、愛情豊かに大人がかかわります。その中で、信頼関係を深め、自己肯定感を育てます。

研究紀要

(2) 公開保育（研究）実践検討会 までの経過

3つの視点の「つながり」を基にスーパーバイザー訪問園内研修で、桜花学園大学教授上村晶先生より「つながる」と「つなげる」の違いや「Connection」と「Network」の違いを捉え、園として、職員が共通認識を図っていくよう助言があった。そこで、保育場を振り返り、0歳児から5歳児のこどもたちの姿をドキュメンテーションで各部屋に掲示、保護者に対してもアプローチしていくことから取り組みを始めた。

8月～9月 幼児教育アドバイザー園訪問

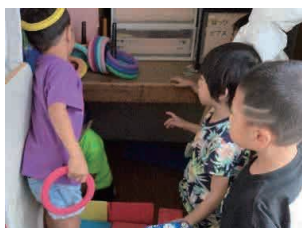
4歳児の製作の様子



5歳児の「けいさつごっこ」話しあいの様子



パトカー作り



6月・10月 スーパーバイザー訪問 園内研修での助言から

「こどもの主体」を捉えるとは、遊びの環境、生活の場面においてこどもが主体性を発揮できるように私たち保育者ができることは何なのかと振り返り、こどもにかかわっていくことで、こども自身が生き生きと遊びを楽しんでいるのかこどもの姿を捉えていくことが大事である。また、こどもが育つ過程における「つながり」を園内で具体化し、0歳からの育ちをつなげて捉えていくことや、こどもとの話しあい（サークルタイム）のねらいを振り返り、こどもの主体性が発揮されるものにしてほしいことの助言を受ける。

こどもと共に遊びを楽しむことを通して、こども自ら、考えたり、工夫したりし、理解できたことが積み重なっていく。また、地域の人との交流はテーマのつながりにも通じている。園内でも、年下の子があこがれをもち、製作物をじっと見たり触れたりしてつながっている。こどもと遊びを充実させていくことが大事である。

園の取り組み

「こどもの主体性を育てる環境とは」という視点から園内で話しあった。こどもの遊びを捉えていくにあたり、保育ウェブを作成し、職員間で共有し、こどもの興味・関心を考察し、遊びを楽しむことへつなげていった。様々な角度から意見を出しあい、園内の職員やこどもにもわかりやすくするために、ドキュメンテーションの作成を見直したり、サークルタイムで何をどう話しあうか考え、取り組んできた。

研究紀要

(3)

公開日当日の保育

「むしの遊び」4歳児

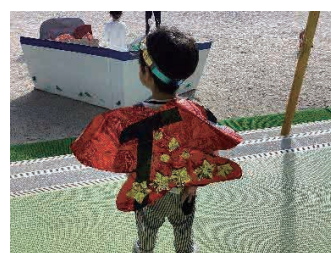
遊びの経過

植物や生き物に興味・関心があり、園庭で探したり、飼育物を熱心にのぞいたりしていた。カマキリを見つけ、飼育ケースで飼い、捕食する様子を見た。図鑑や素材や道具を様々用意し、こどもたちがイメージする虫を作ることができるようにしていった。一人ひとりのイメージを受け止め、保育者も一緒に考え作ったり、保育者自身も身に着けるものを作って見せたりしていった。カマキリになった自分をどう表現しようかと保育者に「捕まえて」と要求するようになってきた。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

夏の間、カブトムシの観察を毎日のように続ける子や草抜きすると「どんな根っかな」と草の根を集めていた子がいた。こどもたちの興味・関心がある自然物を取り入れた遊びを始めると、遊びが広がり始めた。好きなことに熱中し、「そろそろ、給食を食べようか」と言葉をかけても「えー、もっとやりたい」と夢中になっていた。虫の衣装が出来上がってくると、追いかっこを楽しみ始めた。最初は、保育者に追いかけられたり、保育者を捕まえたりの繰り返しであったが、虫がいる場所をイメージして木や草などを置いたり、捕まった人がいる場所が出来上がっていくと、けいどろなようなルールのある遊びに発展してきた。

室内では、虫の衣装を色とりどりに工夫し、それぞれのこだわりに応じて、作り上げていた。昨日作った物に手を加えている子もいた。図鑑や飼育ケースなど展示物を参考にしながら、保育者の手助けを受け、友だちに相談し、自分なりのお気に入りのグッズを作り上げ、身に着けると満足そうであった。園庭では、たものお面と手作りたもをもち、先に虫になって外にいた保育者を目掛け走って行った。まずは、大好きな保育者を捕まえ嬉しそうにしていた。捕まった保育者は、他の虫になりきっている子に助けを求めている。虫の衣装を身に着けたこどもたちは、捕まらないように家に隠れようと工夫していた。捕まっても「助けてー」と声を出し、友だちを呼んでいた。虫のグッズを身に着け、友だちや保育者と思う存分走って体を動かしていると、途中で、グッズが壊れる子もいたが、困った様子はなく、グッズを直すためのコーナーに行き、テープやボンドを使い、自発的に直していた。難しいところは、そばにいる保育者に声をかけていた。捕まえるたもチーム対、捕まらないように逃げる虫チームがお互いがどうしようかと作戦を立てるように保育者が仲介することで相談し、追いかっこを楽しんでいた。



研究紀要

公開日当日の保育

「けいさつごっこ」5歳児

遊びの経過

家庭での体験や友だちとのやり取りを通し、警察官について調べ、使っている物を作ろうと、大きな段ボール箱でパトカーを作ったり、警察手帳を作ったりし始めた。興味・関心のある子は、クラスの半分ぐらいであるが、地域の交番を訪れ、警察官に話を聞き、こどもたちの中で本物に近づきたい、警察官の仕事を手伝いたいという思いが生まれてきた。今度はクラス全員で、所轄の警察署に出向き、話を聞いたり、白バイを見せてもらったりした。いろいろな物を作り、園内で、パトロールしたり、警察官と泥棒のやり取りをしたりして、遊びが他の子にも広がり展開していった。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

前回、交番に行き、パトカーを見せてもらったことや、最初に作ったパトカーが壊れてしまったこともあり、2台目のパトカーは、見せてもらったパトカーと同じように、サイレンやマイク、「カーナビ」などをつけるようにした。そして新たに、こどもたちの中では、白バイ作りが始まっている。

今日は、その白バイの正面のロゴやフォルムなど、訪問した日に撮って印刷した写真や、質問して分かったことなどを手掛かりに、パトカー同様、本物に近づけようと、こども自身で試行錯誤し、考え、作ろうとしていた。シートの素材やサイレンなど、どこに何がどう使われているのかこだわって、作っていった。

また、警察官の衣装は実際の警察官に会ったことで、濃淡の青を使い、二重にして作った警察官の衣装とひも付きの警察手帳なども本物に近づけてあった。交番に行った時に、こどもたち一人ひとりが手書きの似顔絵と名前入りの手作りの手帳であいさつをすると、警察官も同じく警察手帳を見せ、あいさつしてくれた。その時、警察官の本物の手帳には、ひもがついていることに気づき、「どうしてなのか」を聞き、園に戻り手作りの手帳にひもをつけていた。

衣装を身に着け、手作り警察手帳をもち、公開保育の参観者にも警察官になりきって手帳を見せたり、パトロールに出かけたりしていた。パトロールは、パトカーに乗って出かけていた。パトカーの操作は、ペットボトルのふたなどで作ったボタンを触ってイメージしたり、この近辺の地図が貼ってあるカーナビを見て、「サーティワンに行く」と友だちと相談したりして、役になりきっていた。テラスに置いてあるパトカーには、年下の子も興味津々で、触りに来るがあった。年下の子への対応も、警察官になりきり言葉をかけていた。

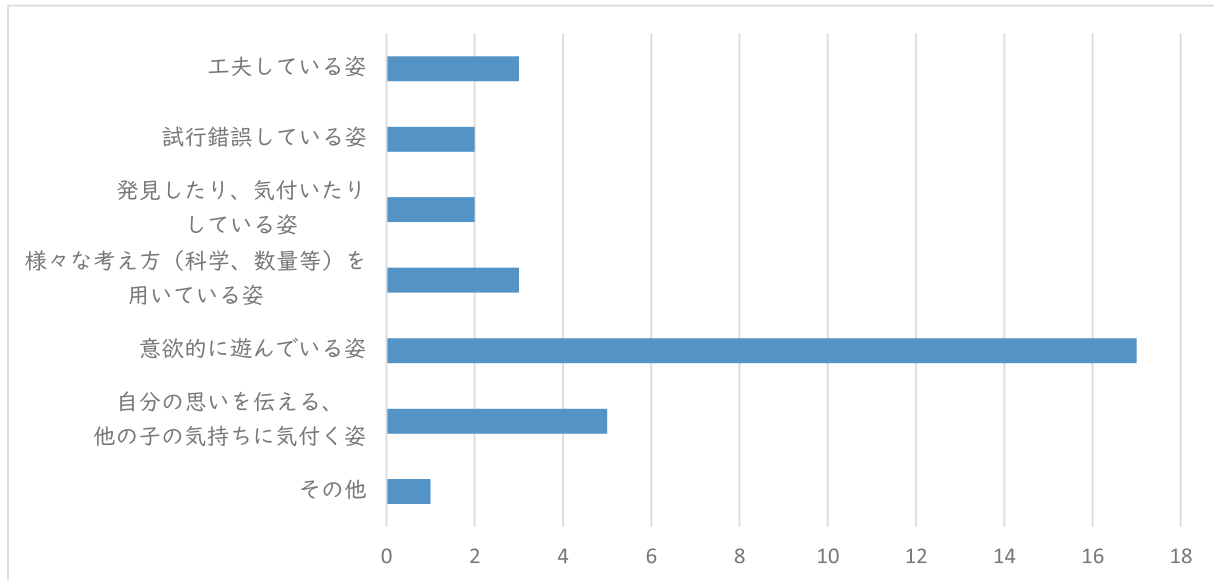
こどもたちの本物の警察官へのあこがれと遊びの世界が行き来し、ごっこ遊びが続いていた。



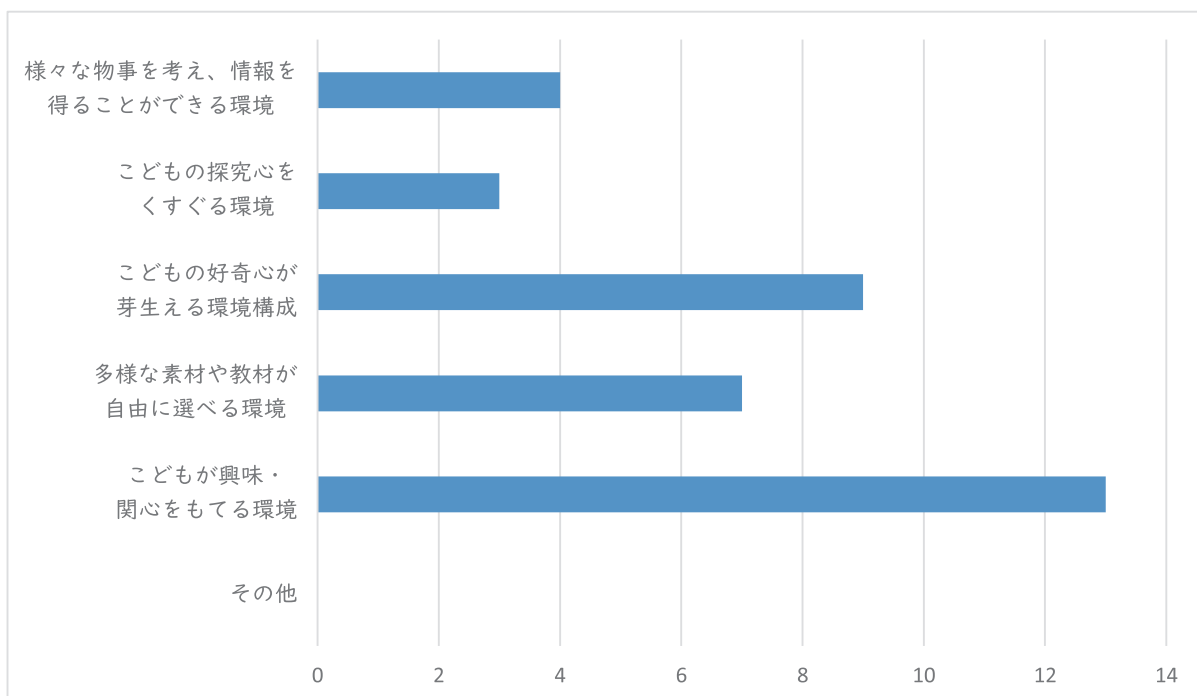
(4) 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

「むしの遊び」4歳児

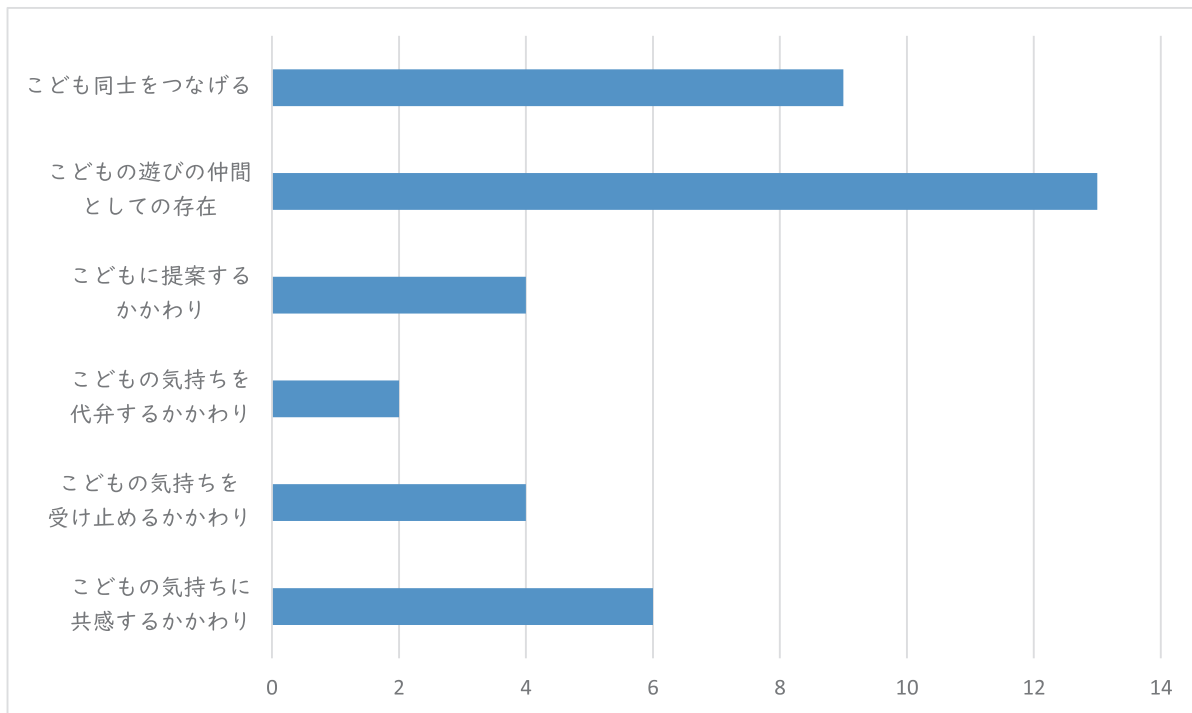
① こどもの姿から



② 環境について

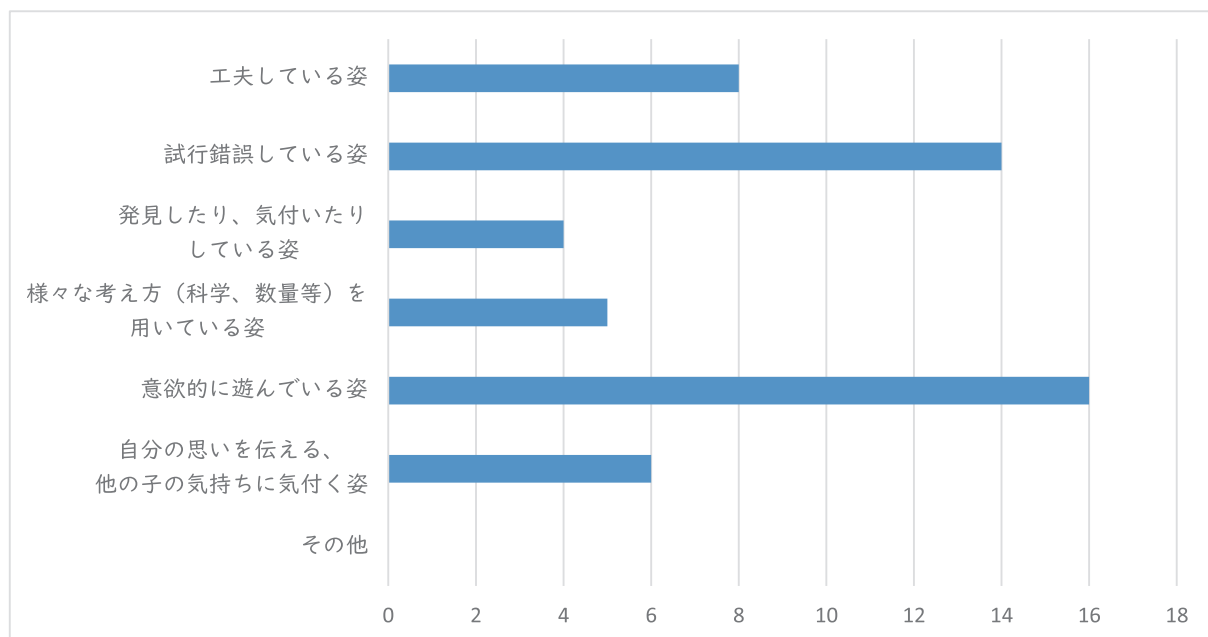


③ 保育者のかかわりから

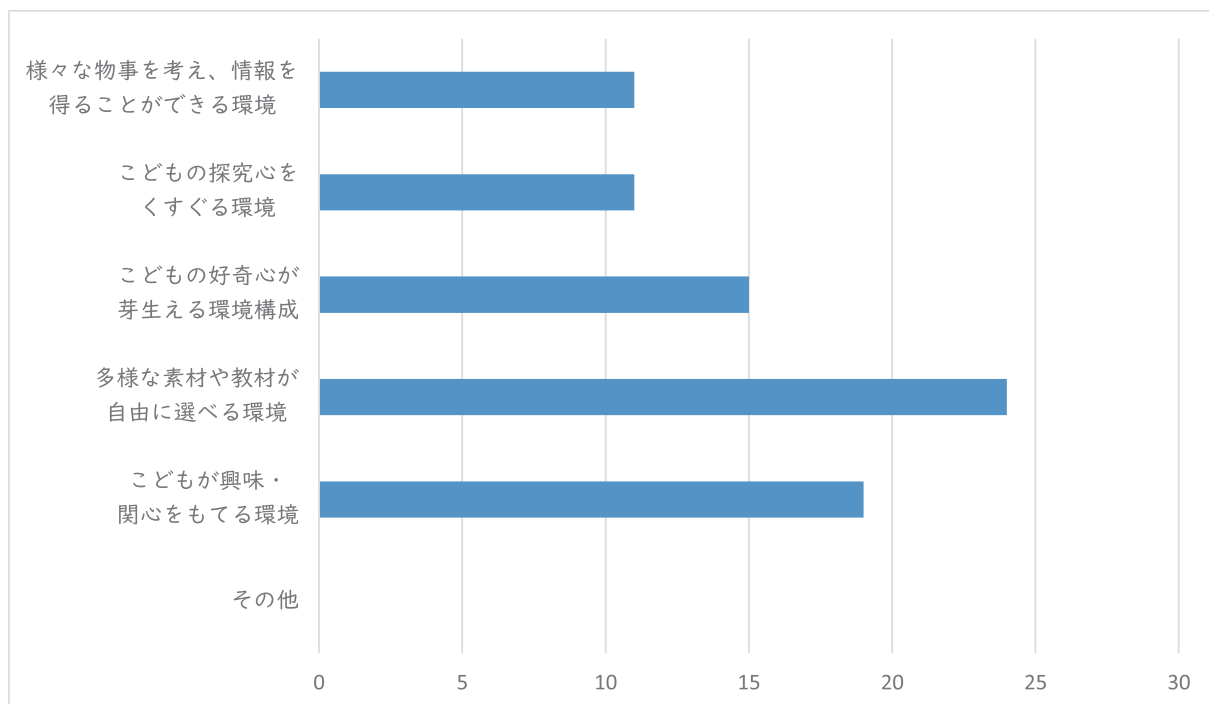


「けいさつごっこ」5歳児

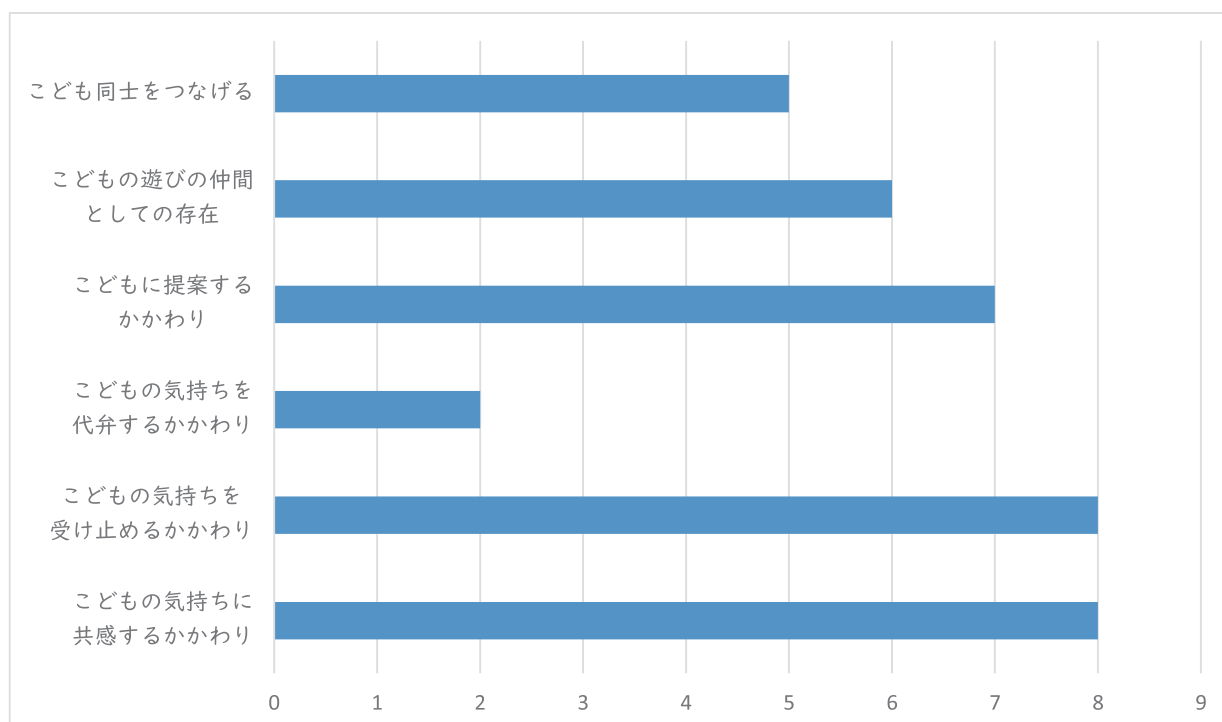
① こどもの姿から



② 環境について



③ 保育者のかかわりから



2)実践検討会

(1) グループワークで討議したこと

「むしの遊び」4歳児

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・「入れて」と虫の追いかけて遊びに加わり、「私は虫になる」と役割を選び、追いかけるのを楽しんでいた。 ・捕まって虫かごの中にいる子は、一生懸命「誰か、助けて」とアピールしていた。 ・一旦は、追いかけてをやめていたが、保育者や虫役の子が捕まっている様子に気づき、「やっぱり、入る」と言って、虫の衣装を身に付け、助けにいった。 ・始めはたもの役をしていたが「虫になりたい」と虫になると保育者と一緒に作戦を話しあい、うれしそうな表情をしていた。 ・繰り返し、何度も追いかけてり、逃げたりし、遊びを楽しみ続けていた。	・虫の追いかけてこのため、自分が作った衣装を身に付ける子、虫を捕まえるのにどのたものがよいかたも比べ選ぶ子がいた。 ・チョウチョの羽を作ろうといろいろな素材を試しながら、どの素材が自分の作りたい羽のイメージに近づけることができるか考えていた。 ・観察ケースを見ながら、さなぎや幼虫を見つけると、そばにいる友だちに「この名前はなに」と問いかけ知りたいことを追求したい気持ちを表現していた。 ・追いかけては「虫」対「たも」のチーム戦であることを感じ、どうすればよいか保育者が仲介し、話しあう姿があった。	・カマキリをペットボトルをつなげた手作り観察ケースに入れ、カマキリの様子を図鑑と見比べたり、カマキリが食べたトンボの死骸を触ってみたりしていた。 ・折り紙の絵本を見ながら、好きな虫を作っていた。 ・虫の衣装に飾りをつけようとし、接着剤の用途が分かり、素材（紙、段ボール、モールなど）によって、どれを使うか（ボンド・セロテープ・ガムテープなど）選びながら作っていた。 ・追いかけて遊んでいると、身に付けていた衣装が壊れてしまったが、すぐに道具が置いてあるコーナーに行き、直していた。こわれても直すことができることや、何を使って直すか判断していた。

② 保育者のかかわりと環境について

子どもたちの好きなことが遊びにつながり、遊びを楽しみ続けることにつながってほしいと願い、散歩の様子をドキュメンテーションで掲示したり、図鑑を並べたりしていた。また、子どもたちが園の中で、体験を重ねてきたことが子どもたちの「やってみたい」遊びにつながっている。素材を豊富に準備し、虫になるための子どもたちのイメージが触発され、道具の扱いも様々であったが一人ひとりの子どもが、自分で作りたい、やってみたいことを実現しようとする気持ち（学びに向かう力、人間性等）を手助けできるようにかかわっていた。

作ったものを身に付け虫になりきると、自分たちが散歩で捕まえてきた体験を再現しようと、園庭での追いかけてを楽しみ始めた。保育者が虫になりきり、捕まらないように逃げると、子どもたちも様々工夫する姿があった（思考力、判断力、表現力等の基礎）。保育者に対抗しようとする子、保育者と一緒がいいと思う子など、それぞれのこどもの発想を受け止め、追いかけてを楽しんでいた。保育者が仲介することで、作戦会議のように「どうしようか」と話しあう機会が生まれた。自分の思いを伝えたり、わからないことは「○○ちゃんなら、知っているよ」（知識及び技能の基礎）など、遊びの中で分かってきた友だちのよさを伝えたりして、虫ごっこを楽しんでいた。

研究紀要

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「先生もこどもも キラキラ」

「好きがいっぱい！ やりたいがいっぱい！」

「なりきることで 自分を出せる」

④ 「つながり」について

保育者と一緒に遊びたい、保育者と一緒に遊んでいる友だちの遊びの中に入りたいという「人が人とつながりたい」という欲求を遊びで体現し、達成していた。困ったら、助けてくれる保育者や友だちがいることを遊びの中でも繰り返し体験していた。その中で、こども自身が「こうしよう」「こうやってみたい」と思うことに挑戦する遊びの姿があった。



研究紀要

「けいさつごっこ」5歳児

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・製作の過程で、どうしてもわからず困った時は、保育者に相談し、自分が納得するものを自分で作ろうとしていた。 ・友だちと協力して作る過程で、役割分担しながら、本物に近づけたものを作ろうとし、期待を膨らませていた。 ・警察官の衣装を身に着け、自分たちで作ったパトカーに乗ると警察官になりきって、パトロールに行く会話が始まった。 ・警察官になるための細部にこだわり、ズボンに引っ掛けるように手錠を持ちたい、帽子のゴムは自分に合うようにしたい、衣装は濃淡で2枚身に着けたいなどこどもの意欲がなりきることを満足させ、達成感につながっていった。	・白バイの正面を作るのに直角ではない角や文字の形などにこだわり、どのように作ればよいか試行錯誤していた。 ・また、左右対称に作ろうと片方を切り抜いた紙をあて、紙の切り方を工夫していた。 ・素材によって、立体的に作り上げるために何を使えばよいか、ボンドやクルーガンなど失敗を繰り返しながら、よりよいものを見つけ、それらを試しながら、作ろうとしていた。 ・白バイ作りをしているこどもたちの中には、見たり聞いたりした白バイを仲間と共に作り上げたいという要求をもち、達成させようと追求する粘り強さがあった。	・白バイ作りでは、警察署で聞き取ったことを再現しようと座席シートの素材を分けて作っていた。また、白バイを撮影してきた写真を見ながら、警察のマークを描こうとする中で、色や形などに気付いていた。 ・パトカーに乗るときは、順番にパトカーの中に入らないと乗れないことや4人で乗る時は、一人ひとりがどのような姿勢をしないと4人全員が乗れないのか知っていて、パトカーに乗る前にこども同士で、「お山座り（体育座り）でね」と声を掛けあっていた。 ・「今日はどこへパトロール行く」とパトカーに貼ってある地図（ナビゲーションのつもり）を見て、「アイスクリーム屋さんに行こうか」など、この近辺のことを知り、なりきってやり取りをしていた。

② 保育者のかかわりと環境について

こども同士でイメージを共有し、「やってみたい」遊びを作り出していこうとする協同的な姿が見られる。こどもがイメージを共有体験し、地域の人とのつながりをきっかけに、発展していったことで、遊びが継続し、こどもたちの考えも深まり、様々な物を作ったり、ストーリーを考えたりする姿が育ってきている。こどもたちの試行錯誤を受け止め、素材や用具を選ぶ時にも保育者は見守り、うまくいかなかったことで気づいたことを大事にしていた。こどもたち自身が、本物に近づけたい要求を達成するために、それらのことを失敗とは捉えず、「今度はこうしてみよう」、「そうか、ここを工夫すればいいのか」など、実際に話を聞いたり、見せてもらったりしたことが自信となって、あきらめずに作り続ける姿につながっていると考えられる。

けいさつごっこの中に、本物に近いものを作ることと、本物の警察官になること、そして「けいどろ」のようなルールのある役割分担をしたごっこ遊びがあることで、クラスの中でも、一人ひとりのこどもの興味・関心に応じて遊びへの参加が多様化できている（学びに向かう力、人間性等）。また、保育者と共に情報を知る様々な方法を知り、情報にアクセスし確かめながら遊びを進める姿があった（知識及び技能の基礎）。

クラス全体にかかわることに対しては、保育者がこどもたちに仲間として相談しながら、一人ひとりが自分の考えを友だちに伝えることができる機会をもち、視覚的に掲示し、警察署を作るのか交番を作るのかなど意識的に働きかけ、共通の目的になっていったのではないかと考えられる（思考力、判断力、表現力等の基礎）。

研究紀要

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「なりきって あそぶ!!」

「見て 聴いて やりたい!!が あふれだす」

「めざせ! みなみけいさつしょ」

④ 「つながり」について

こどもたちのなりたい気持ちが友だちや保育者だけでなく、地域の人とのつながりに広がっていった。友だちと相談することや、様々なことから情報を得ることができなかった時、保育者は頼られる存在であったが、こどもと対等にやりとりをし、仲間としての存在となってきたようであった。この遊びの決定権はこども自身にあり、どうするかは、時にはサークルタイムで話しあい、みんなの中で理解しあったり、折りあいをつけたりしている。遊びの経過をこどもたち自身が自分の言葉で話し伝えあうことで、共感しい友だちとのつながりが深まっている。



(2) 講師助言まとめ 第2ブロック・中部

実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

講師紹介

桜花学園大学教育保育学部

上村 晶 教授



長野県内幼稚園に勤務の後、愛知県内の保育専門学校教員、高田短期大学助教等を歴任

2014年より桜花学園大学保育学部保育学科准教授

2019年より桜花学園大学保育学部保育学科教授

2020年名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士

後期課程修了

著書 『保育者は子どもとどのように

わかり合おうとするのか』他多数

4歳児くま組の「むしの遊び」について

10月に、園を訪問した時には、虫の衣装を作って、それを身に着け、外に出て遊んで、なりきっていた。こどもが虫と出会い、虫になりきり、虫かごに入りたい、虫を捕まえてみたい、虫になりきって、捕まえられたい、というところから、追いかけて遊びまで発展していた。

また、室内ではこども同士が言葉でイメージを伝えあい、カマキリの家を作ろうとしていた。

今日は、図鑑を見ながら、虫の成長を説明する場面では、自分の言葉で、自分の知っている知識を伝えようとしていた。虫の成長のプロセスを知っているだけでなく、自分の言葉で語れるということは知識・技能の基礎だけではなく、思考力・判断力・表現力の基礎の育ちの姿と言える。自分でアウトプットすることによって、はじめてその知識が自分の中に落とし込まれ、生きたものになっていくのである。聞いてくれる相手がいるということが、こどもにとっては、知っているだけの知識ではなく、生の語れる知識となり、伝えあうことでこどもの深い学びになっていく。

外での追いかけては、捕まえられた時の笑顔から、保育者が大好きなことが分かる場面であった。保育者が手を抜かず、本気で追いかけてこをしていった。こどもが自分で段ボールをかぶったり、虫かごに隠れて「みつけた」「みつかった」と何度も繰り返したりする中で、試行錯誤していた。繰り返しながら、友だち同士で見つけあうことで、面白さを共鳴できる。思いやイメージの共有が4歳児では難しいが、一緒に「追いかける」「追いかける」ことを繰り返す中で、互いの思いが重なりあっていく。遊びの発展の過程で、いざこざが出てくることもある。しかし、いざこざも経験し、乗り越えるために、こども同士で考え、自分たちで編み出していく力をつけていくことが、年長になったときに重要になってくる。

5歳児きりん組の「けいさつ」ごっこでのイメージの共有

友だちという関係より仲間意識という関係性が育ってきている。仲間関係の中で、試行錯誤したり、遊んだりする中で、友だちから仲間に深化していくようなところがあった。

10月に南警察署を作ったり、パトカーを作ったりし、自分たちの力で、よりリアルに作りたいたいと思いが高まった。一方で、囚人服を着ている泥棒を捕まえる追いかっこをしていた。囚人服の保育者を捕まえ嬉しそうにしている姿から、保育者が好きなことが伝わる。捕まえた泥棒役の子を牢屋に入れるが、牢屋に入った泥棒と警察官がじゃんけんし、泥棒がじゃんけんに勝つと牢屋から出られるというルールで遊んでいた。リアルとファンタジーの狭間でこどもたちが物語を作っていた。

公開保育の場でも、こどもたちは警察官になりきり、公開保育の参観者に役割（例えば、けいさつごっこをしている自分たちをインタビュー調査にきた）を与えるなど、ファンタジーを作り上げていた。

白バイの作製は、近くの友だちと対話的に進めながら、本物を求めている。どう作ろうかと困っているときに、保育者は「どうしたいの」「こうしたいの」と応答し、「こうしたら」とは言わない、ファイナルアンサーを言わない。こどもが最後にファイナルを決めている、自己決定していく中で、主体が育っていく。こどもたちが、実際に白バイを見てきたからこそ、より本物を実現したいとの思いがある。どこまで、リアルに再現したいのか、忠実に再現したい思いがある。自分たちで、見て、警察官にインタビューし、白バイに触ったという体験が生きている。こどもたちの中で作り上げたいゴールイメージがある。

「つながり」について

ときわ保育園のつながろうとするテーマ「つながり」の捉え方については、AとBのつながりなのか、もっと多方面につながる網目のようにつながることなのか。コネクションなのかネットワークなのか。つなげるのかつながるのか。こどもが自らつながるのか、大人がつなげるのか。「つながりをどう捉えるか」には、保育者の主観や保育観が影響している。

大人が何とかつなげてあげようなのか、それとも、こども自身がつながりを生み出していく存在として、つながりが生みだされる豊かな環境を大人がどう整えるのかを考え、手助けしていくことが大切なのか、今一度問い直す必要もある。

つながりができるから個が際立っていく。まったくつながりのないAであつたら、Aが存在する实在論だけ、それぞれの違いが見えてくるので、際立っていく。関係性の中で在り方が変わる。「関係からはじまる—社会構成主義がひらく人間観」（*2）において、ガーゲンが「我つながる、故に我あり」と、説いている。私とあなたは違うというだけでなく、私とあなたとの関係性の中で人の在り方は変わる。私は変幻自在的な存在である。こどもも、関係性の中で我が出る。どういったネットワークの中で個が際立っていくのかということが、つながるからこそ見えてくる。立ち上がってくる個がある。

安心と挑戦の循環について

小学校に上がるまでの時期が大事である。「はじめの100カ月ビジョン」に「安心できるから、新しいことに挑戦ができる」とある。安心できる保育者、安心できる場があるからこそ、新しいことに挑戦できる。保育者とのつながりがあるからこそ、こども同士のつながりが生まれる。「安心感の輪」（ボウルビィ）は、安心できる大人がいるから、こどもが外の世界に行くことができる。困ったりしたら、助けてと帰ってくる。これが、自律と依存が円環し、安全な場所があるから、徐々に外へ向かって行く。不安な子は「見て」「見て」と保育者のそばでアピールする。安心できている子は「見ててね」と「手を出さないでね」という合図を送る。根っこにある保育者とのつながりが、こども同士のつながりの基盤になっている。

保育者との安心と信頼関係を基盤としながら、3つの資質・能力の矢をどうやって育てていきたいか。3つの資質・能力の「学びに向かう力・人間性」、「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」10の姿は通過点のトンネルみたいなものである。10の姿を通過するようなイメージで、「やってみたい」を積み重ねていくことが大事である。小学校に上がっていった時に、幼保小の架け橋プログラム（5歳児1年と小学校の1年）でも言っている「やってみたい遊び」を発信し、幼児教育の学びを知ってもらうことがこどもの姿をつなげていくことである。

本来は、カリキュラムをつないでいくことであるが、小学校の教室の一部に遊びのコーナーがある。こどもの呼び方を就学前施設にならいう工夫するなど、こどもの育ちをつなげるためにそれぞれの施設や小学校でどのような工夫をしてつないでいくかが幼保小の架け橋プログラムの取り組みになっていくのと思う。

「四日市市学校教育ビジョン」について

つながるからこそ自己が確立して際立っていく、個性が見えてくる。環境との対話から、遊びがどうつながって発展していくのか、どう物語を紡いでいくのか。物語を紡いでいく主人公はこどもであり、保育者は伴走者として寄り添う。加えて、保護者とつながることも大事である。

保育者間のつながり、緩やかな保育者間のつながりが同僚性を生む。小学校と連携組織同士のつながり、公開保育によって、園が広く開かれていく、つながっていくということである。

妊娠期から小学校入学までがおおむね100か月、人生のウェルビーイングを育てるうえで大事な時期である。そのために、100か月の先をイメージすることが大事である。保育者が小学校へ行った後のこどものウェルビーイングをイメージする。こどもはそのまま自分のストーリーを生きていく。こどもが遊びの物語の中で、主人公になって、一人ひとりがつながりあいを楽しむ保育が求められているのである。



IV 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

3 第3ブロック・南部 実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕

生活や遊びを通し、思う存分体
を動かし、様々な経験を重ね、
自立心と自律性を育む。



こどもの主体性を大切にした豊かな体験と夢中になれる遊びを充実できるようにし、
学びの接続を考えていく……
私たちの実践への意見を交流しあおう。

1) 公開保育(研究)

(1)

楠こども園概要

四日市市立楠こども園

四日市市楠町北五味塚2060-63

059-398-3133

クラス編成

歳 児	0歳児	1歳児	1歳児	2歳児	2歳児	3歳児	3歳児	4歳児	4歳児	5歳児	5歳児	合計
クラス名	にんじん	とまと	すいか	たまねぎ	びいまん	さつまいも	きゅうり	ほし	つき	たいよう	そら	
在籍児数	6	12	8	16	12	16	21	21	22	25	25	184

教育・保育目標	自分で考え 自分で決める！ だから楽しい！ ～それが生きる力～
めざす子どもの姿	「やってみたい」という気持ちがわきおこる子ども ・自分で考え 自分で決められる子ども ・満足するまで遊び込む子ども
めざす園の姿	異年齢の育ちを中心に 子ども社会を育む園
園内研修主題	・遊び込める環境と空間の実現を目指す ・自分たちの生活を自分たちで作っていくための 子どもミーティングの充実 ・異年齢での育ちの探究
重点目標	○ 安心・安全な環境のもと、しなやかな心と体を育てる ○ 人から愛され、自分を大事にし、互いに認め合う心を育てる ○ 達成感、充実感、思考力、造像力、探究心を育てる

(2) 公開保育（研究）実践検討会 までの経過

こどもの主体性をどう育てていくか、「自分で考え、自分で決める！だから楽しい！～それが生きる力～」これを実現するために、園内で環境構成やこどもたちの日々の活動について見直し、職員がチームとなり取り組んできた。スーパーバイザー訪問園内研修では、こどもが遊びを見つけるまでの心の動きに対する空間や時間における保育者の手助けについて提案を受け、幼児教育アドバイザーによる園訪問や園内での実践と検討を繰り返してきた。

10月園訪問

4・5歳児縦割り保育における環境設定とこどもの遊びの様子
にこにこルームでの遊びの様子



きらきらルームの遊びの様子



6月・11月 スーパーバイザー訪問 園内研修での助言から

こどもたちは、能動的、受動的に行動するだけではなく中動的という動きもあり、周りの事物にたまたまかかわり徐々になんか楽しくなって遊びに変わっていくことが「主体性」につながっていくことがある。そこで、なにげなくかかわり深まっていく空間をどう作っていくか、こどもが「なにしようかな」と思いめぐらせたり、「ああそうだ、これで遊んでみよう」と環境にかかわり、遊びがつかわれていったりする過程をどのように保障していくのか提案された。

また、年齢別のクラス環境から、4・5歳児の縦割りのかかわりがもてるよう各部屋をこどもたちと考え、遊びのコーナーを設定したが、こどもの所属をしていることの安心感の保障・グループアイデンティティーを今後、どう作るのかの助言があった。

その後も、こどもの姿や遊びを中心に据え、これまでのやり方にとらわれず、こどもの主体性を育てる教育・保育について、検討し、工夫をしていった。11月の園内研修では、こどもたちが自ら遊びを選んで楽しんでいる姿に変容してきているという助言があり、こどもたちが安心して環境にかかわり、挑戦している姿を丁寧にとらえ、引き続き遊び込める環境を目指した。

園の取り組み

異年齢の交流を深めながら、こどもたちのやりたい遊びが十分にできる環境設定や保育者のかかわりについて、日々見直し、実践へとつなげてきた。また、園内研修でも討議を重ね、こどもの育ちにかかわることで、その課題に対して保育者の思いやどのような取り組みが必要なのかという共通理解をもてるよう、職員間の連携を深めていった。

研究紀要

(3)

公開日当日の保育

「なりきりごっこ」4、5歳児(にこにこルーム)

遊びの経過

にこにこルームでは、折り紙・包装紙・空き箱・ダンボールなどの様々な素材を使いイメージしたものを作ったり、いろいろなものになりきったりして遊ぶ姿があった。そこでこどもたちの興味・関心を引き出す環境を整え、保育者と共に友だちとのやり取りをしながら、遊びが楽しめるようにしていった。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿
(主な姿・環境・保育者のかかわり)

こどもたちの興味・関心をもとに、保育者や友だちと一緒に作ったり、作った物を使って友だちとなりきったりして遊ぶことを4歳児を中心に繰り返し楽しんできた。衣装を身に着けその役になって、今まで経験したことをイメージし表現しようとしている。

そこで、保育者は様々な衣装をハンガーにかけ、着たい衣装をいつでも身に着けられるようにし、イメージに合わせて自分でお面を作れるように準備していた。こどもたちは早速ザリガニやちょうちょの衣装を身に着けると演じたり、ダンスを踊ろうとしたり遊びの続きが始まった。

衣装や小道具に応じて、保育者が仲介し、劇のストーリーを進めると、一人ひとりが「そうだ、思いついた」と思ったことを表現していった。その姿に「〇〇みたいだね」と言葉で保育者が伝え、うれしそうに体を動かし、友だちと顔を見あわせていった。

また、それぞれの役になっているこどもたちが、同じように真似しあったり、部屋中を動き回って、ウレタン積み木で遊んでいるこどもたちにもアピールしに行ったりする姿もあった。その様子に合わせ、保育者もまた、同じように動き、遊びが続くように援助していった。

それぞれの場面で、こどもたち一人ひとりの様々な発想を受け止め、「そうだね、そういうふうに見えるね」と同調したり、「わたしは、こうする」と言う子が達成できるようイメージを共有し、手助けしていった。



研究紀要

公開日当日の保育

「街づくり、カラオケごっこ」4、5歳児（きらきらルーム）

遊びの経過

きらきらルームでは、園の行事の一環として5歳児が水族館に行ったことをきっかけに、水族館ごっこが始まった。保育者や友だちと楽しんだ経験を活かし、「こんなことができるかな」「こんなふうになれるかな」など友だちや保育者とイメージを共有し作り上げる中で、遊びを楽しんでいけるようにしていった。様々な物を作り、作った物を使いごっこを繰り返し楽しみ、気の合う仲間と共に遊びを作り出そうとする姿が見られるようになってきた。

遊びの充実と発展につながるこどもの姿 (主な姿・環境・保育者のかかわり)

水族館ごっこを通して、「おもしろかった」「もっとやりたい」「今度はなにしようか」と、やってみたいと思うことを友だちと相談し、怪獣と街のパノラマ作りを始めた子たちや、カラオケごっこを繰り返し楽しんでいた子たちが、遊びの続きを始めた。

街づくりは、イメージした車が作れるように、素材を選びじっくり時間をかけ作ろうとしていた。そのそばに、友だちもやってきて、一緒に考え作り上げていた。車のタイヤが取れないようにと考えたり、作った車を思ったように街の中で動かすことができるのか繰り返し走らせ試したりしていた。保育者は、こどもたちのイメージを丁寧に受け止め、「どんなものを作りたいの？」

「どうやって作るの？」など、質問を通してこどもの考えを深め、こどもたちが試行錯誤する過程を大事にし、工夫や発見を認めていった。また、自分たちの住んでいる身近な駅の写真を準備し、こどもたちがイメージを表現したいと意欲的に自ら、写真を手に取ってみながら駅作りをしていた。そして、保育者の手助けを受け、こどもの作りたい思いが実現し、街をどんどん本物に近づけようとしていった。

カラオケごっこでは、店の様子を見て、保育者が客になって行くと「受け付けはこちらです」「〇番のおへやになります」など、カラオケ屋の店員のようにこどもたちがやり取りを始めた。カラオケボックスに客の子も訪れ、部屋から「ポテトちょうだい」と注文すると、店員の子は耳に受話器のような箱をあて内線で注文を受けていた。店員の中には、トイレ掃除をする子もいて、トイレが詰まったということで、詰まりを直そうと道具を探していた。そこで、保育者に相談して、ラバーカップをタブレットで調べてもらい、ラバーカップを作り、詰まったトイレを直すことに遊びが発展していった。トイレの詰まりを直すしぐさは、なりきって本物のように演じていた。カラオケで提供するデザートや飲み物などを様々な素材を使い、より本物に近いものを作ることにこだわり、タブレットで確認しながら作り上げていた。

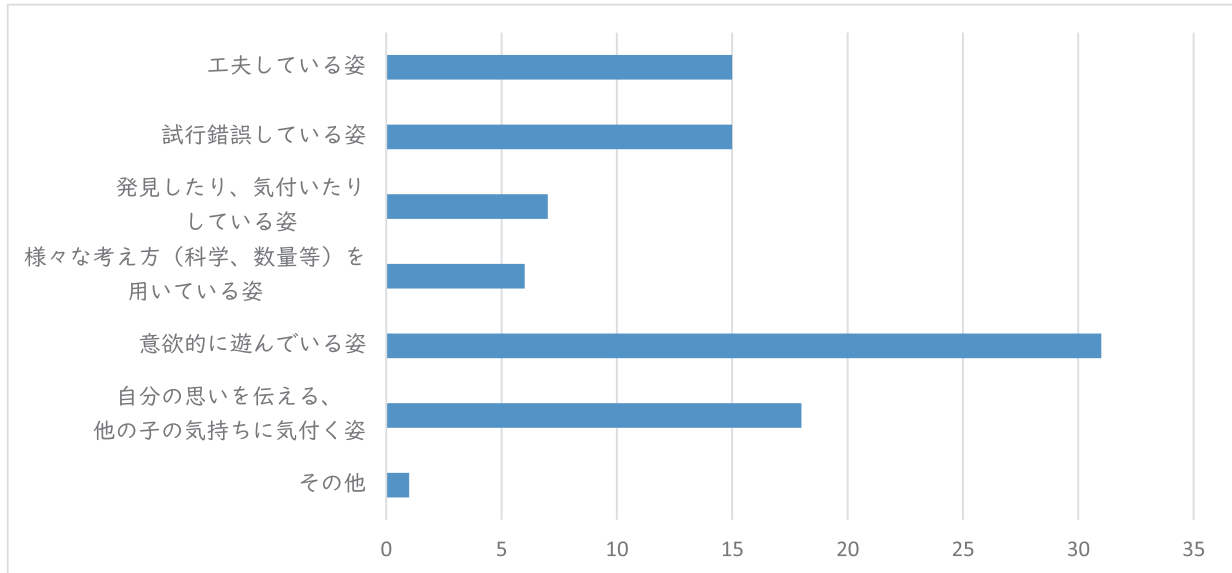


研究紀要

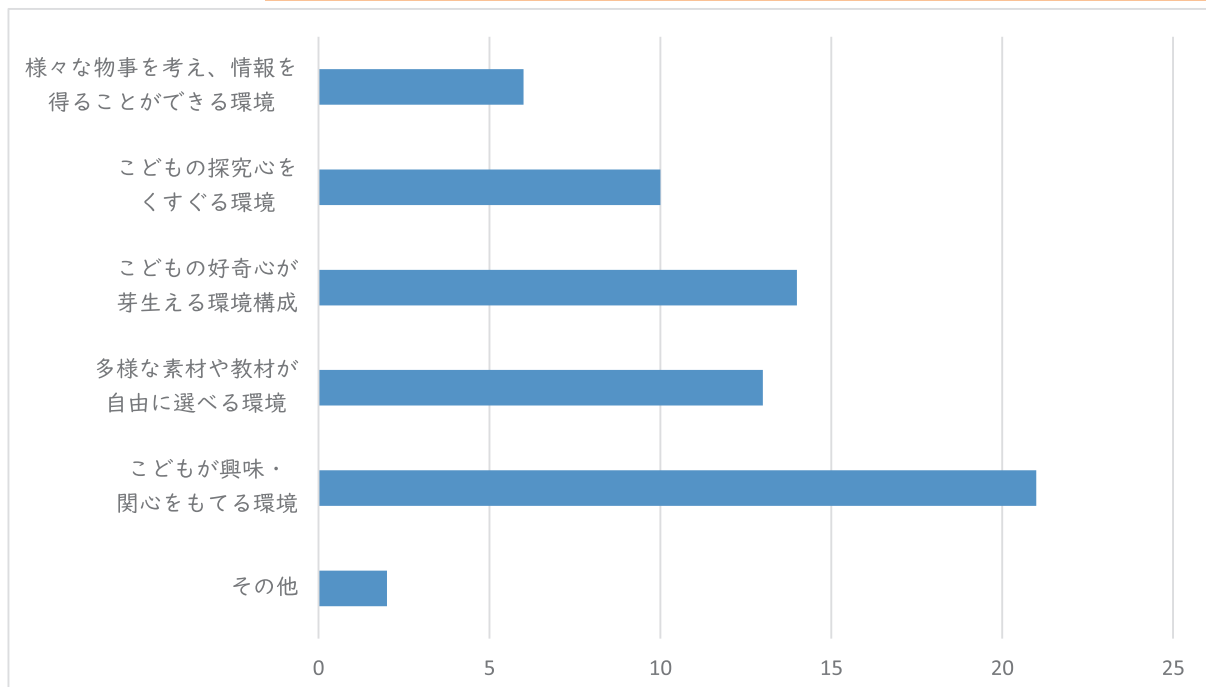
(4) 公開保育(研究)参加者アンケート回答結果より

「なりきりごっこ」4、5歳児（にこにこルーム）

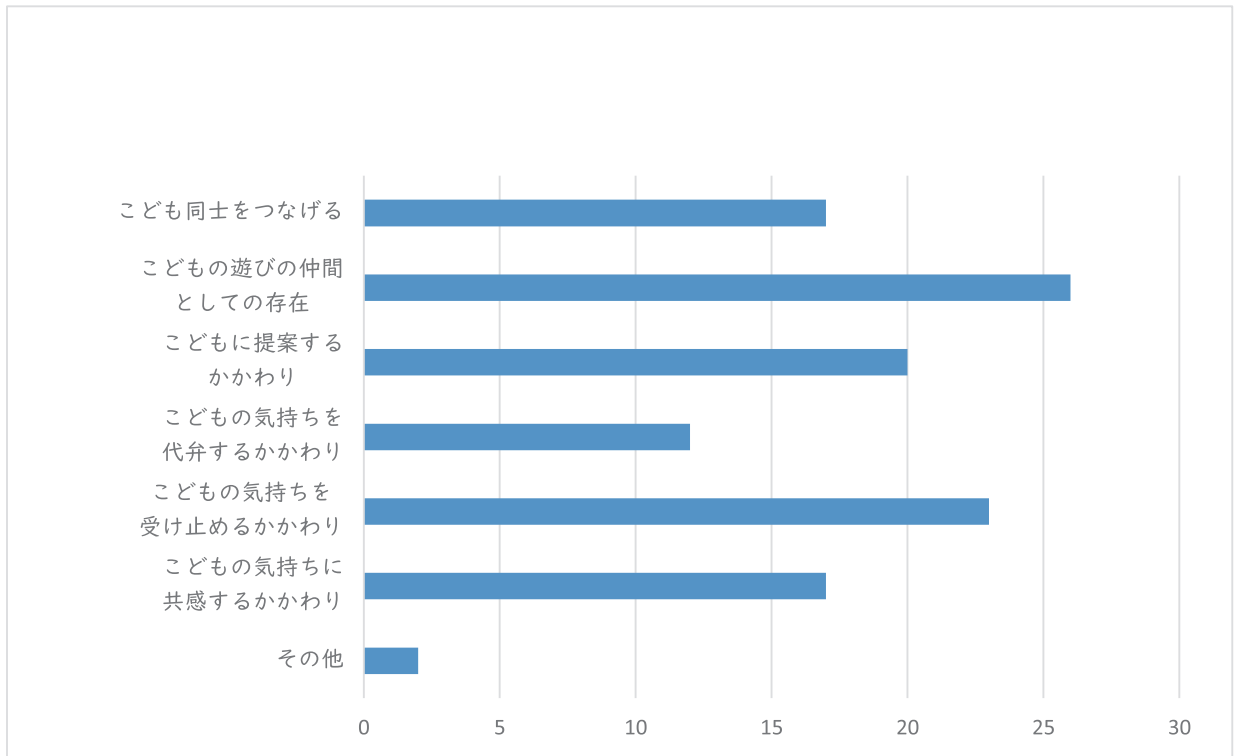
① こどもの姿から



② 環境について

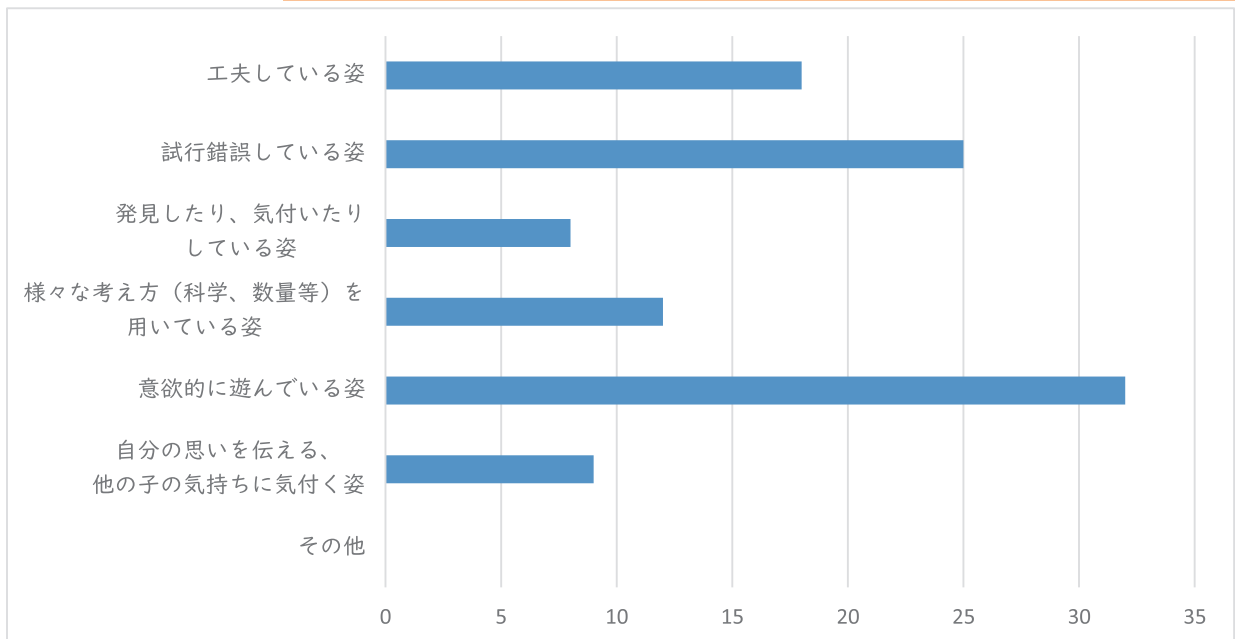


③ 保育者のかかわりから

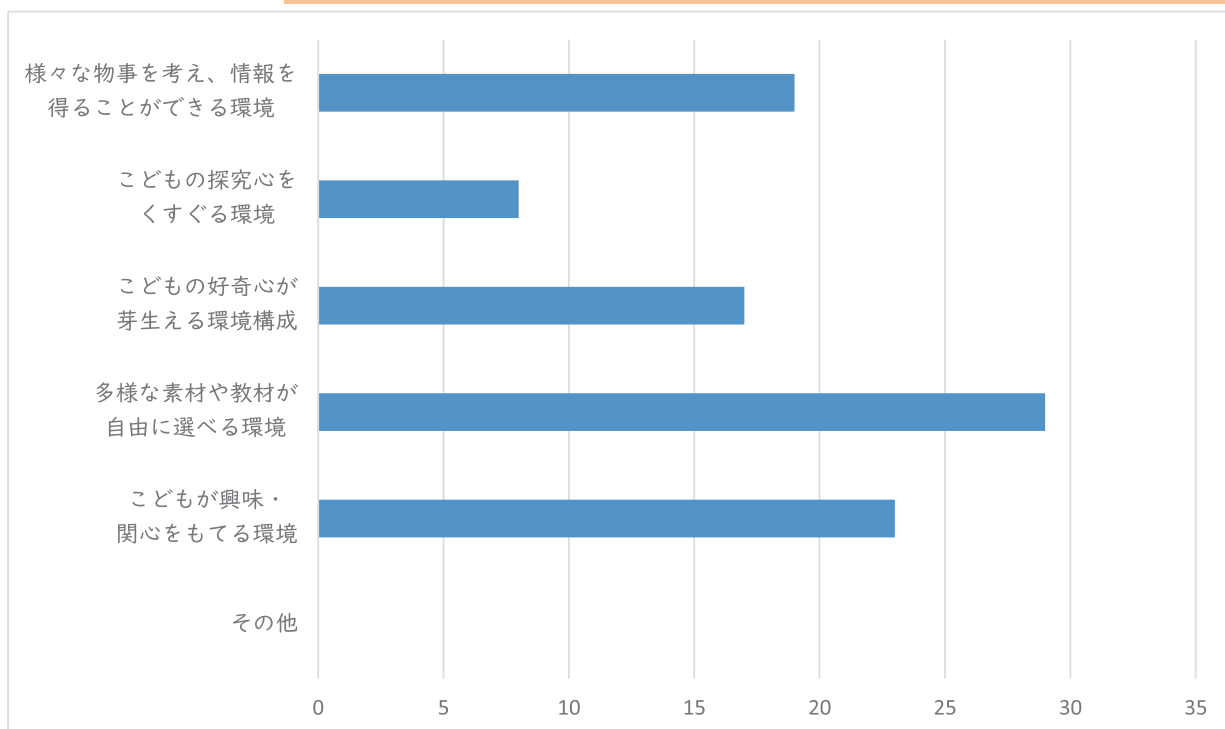


(2) 「街づくり、カラオケごっこ」4、5歳児（きらきらルーム）

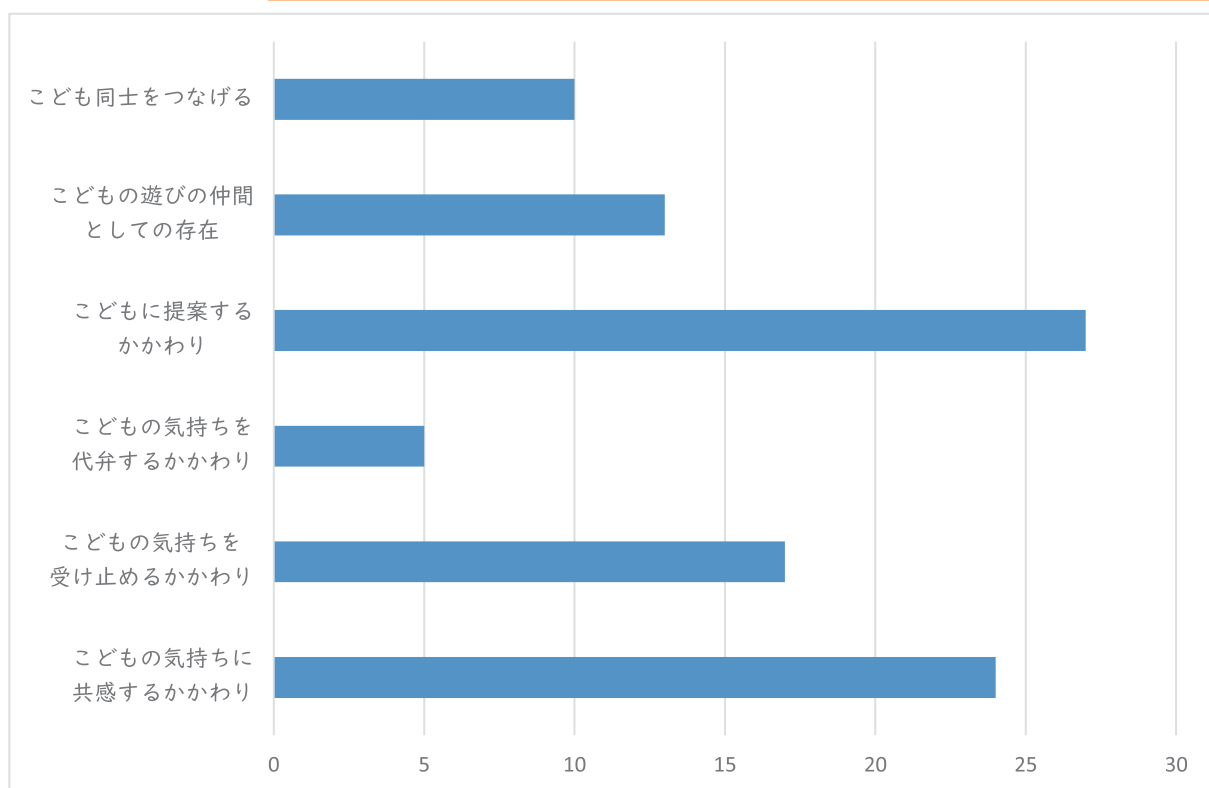
① こどもの姿から



② 環境について



③ 保育者のかかわりから



2)実践検討会

(1) グループワークで討議したこと

「なりきりごっこ」4、5歳児(にこにこルーム)

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・様々な衣装の中から、これを着てみたいとこどもたちが、自分が選んだ衣装を身に着け、チョウチョやザリガニなど衣装からイメージできる役になりきって遊んでいた。 ・友だちが使っている衣装が気になっていたが、言葉をかけることができずにいたら、友だちが気づき、「使いたいん、貸したろ」「あっ、ここにあった、同じや」とやり取りしていた。	・ウレタン積み木を使い、友だちと一緒に助けあいながら、立体的な家を作り始めた。保育者が手助けしながら、中に入ったり、上に登ったりできるように、自分たちでそれぞれの場所に行き、試しながら作っていた。 ・保育者の言葉がけにに応じて、場面をイメージし、「じゃあ〇〇にする」「私はこうやってする」など自分なりにどのように表現しようか考えていた。	・劇ごっこでは、他の遊びにかかわっていた保育者が何も身に着けていないことに気がついた子が、「先生もこれつけやな、何の役かわからんよ」と身に着けるよう話しかけていた。劇ごっこは人に見せたり、何か身に着けて続ける、表現することを遊びを繰り返すことで知っていっている。

② 保育者のかかわりと環境について

身に着けるものを準備することで、今までの経験から、話のイメージが生まれ、役になりきってみたいと思い、遊びだすこどもたちがいた(学びに向かう力、人間性等)。保育者と一緒に遊ぶことで安心感をもち、友だちと同じようにイメージできなくても、保育者が仲立ちすることで、同じようなことをしてみたり、自分なりに考えたことをしてみたりし、自信をもち、なりきる姿があった。保育者が一緒に遊ぶことで、こどもたちも「自分は」という思いを自己発揮し、表現する場面があり、こども同士で、それぞれのよさやイメージを知る機会となっていた。保育者がこどものイメージに寄り添い、共感し、代弁することで、周りにいる子もそれなら自分もやってみようとかどもとこどもがつながっていくきっかけとなり、遊びが広がっていった。こどもが困った時に、そばにいて安心して自分がやりたいことや、やりたいけどできないでいることを保育者に伝えることで、遊びが継続していった。また、少しずつではあるがまわりのこどもたちも友だちが困っている姿に気付くことがあり、保育者は、こどもの育ちを見守っていた。

今までの遊びの経過から、それぞれの遊びのコーナーでのこどもの姿を予測し、室内の他の保育者と連携を取ることで、それぞれの遊びを大事にしながら、つながっていくきっかけを作っていくようにしていた。それぞれのこどもの遊びの発想を認め、言葉で表現し、伝えることで違う遊びをしている子への気付きにつなげていくことが、遊びの仲間へとつながっていくのではないだろうか。ザリガニの衣装を身に着けた保育者の表現にイメージを浮かべ、泳ぐ真似をしたり(思考力、判断力、表現力等の基礎)、海を渡るイメージをこどもによって、様々な表現で楽しんでいた。また、選んだ衣装に合わせて役になりきりたい(知識及び技能の基礎)との思いが一人ひとりが体を動かして表現する姿から感じられた。

③ グループ別に検討した検討した遊びのテーマについて

「なりきって遊ぶってこんなに楽しい～自分で選ぶ 自分で決める～」

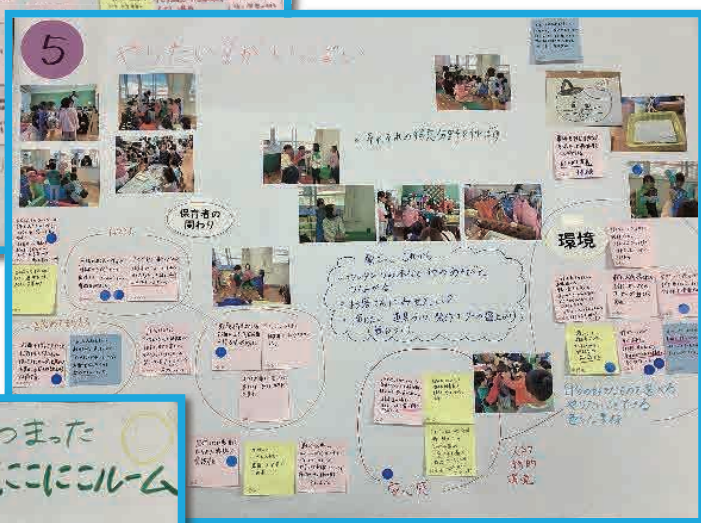
「保育者のナイスアシスト」

「やりたいがいっぱい」

「こどもたちの” やりたい ” がいっぱい しまったにこにこルーム」

④ 「すこやか」について

こどもたちの遊び心を刺激する環境を準備し、いつでも遊びが始められる仕組みを作っていた。様々な環境から自分のやりたいことを選び、遊びを楽しめるようにしてあった。様々な遊びのコーナーには、一緒に遊んでくれる保育者がいつもそばにすることで、安心感を持ち、自分のやりたいことをやってみようとするこどもの健やかな育ちを感じた。



研究紀要

「街づくり、カラオケごっこ」4、5歳児（きらきらルーム）

① こどもの姿について

学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等の基礎	知識及び技能の基礎
・室内の環境や遊びの続きをイメージし、一人ひとりのこどもが、自分のやりたい遊びを見つけ熱中していた。 ・車が作りたい友だちが来るまで、気にかけて手助けしその子を待ちながら作り続けていた。 ・作った車や人を使ったり建物を置いたり、友だちと相談しながら、街づくりを楽しんでいた。 ・カラオケ屋では、やりたい役になり、友だち同士でかわり、なりきって会話をしていた。 ・カラオケ屋のストーリーを遊びの中で広げ、イメージを共有していた。	・製作コーナーでは、こども自身がイメージする車をどのように作ろうか考え、作っていた。 ・作った車を動かしている様子を見て、「この車より、タイヤだけの方がよく走るんだよね」と自分が発見したことを伝え、パノラマの街でどう工夫すればうまく動くのか、友だちと一緒に試行錯誤していた。 ・駅の屋根をどうつなげるのか何回もボンドを塗って試したり、付ける角度を変えたりしていた。	・タブレットで自分が作りたいデザートや駅や車などをじっくり見て作ることで、本物の形や色を知り、近づけようとしていた。 ・カラオケ屋では、レジやマイク・歌詞カードなどカラオケボックスで必要な物を作り準備したり、トイレを作りそこに必要な物やどんなトラブルが起こるか知っていたりし、自分たちの身近な環境や文化にどんなものがあるのか遊びを通して分かっていた。 ・図鑑やタブレットを使うことで、自分の知りたい情報を知ることが分かるということを経験していた。

② 保育者のかかわりと環境について

様々な素材を使い、自分たちのイメージした物を作ることを楽しむこどもたちにとって、街づくりやカラオケごっこは身近で、イメージを共有しやすい遊びとなっていた。遊びが継続し、発展していくように環境を工夫することで、こどもの「やりたい」を発揮できる遊びが生まれていった（学びに向かう力、人間性等）。

こどもたちで、街づくりの構成をし、一つひとつの建物をどこに置か車をどのように走らせるか（思考力、判断力、表現力等の基礎）など、友だちや仲間としての保育者と共に相談し、作って遊ぶ姿が育ってきていると感じる。作り方や動かし方など「どうしよう」と困っているときにはこどもの様子に合わせ、提案したり手助けしたりすることで自信をもち、やり遂げようとしていた。

カラオケ屋では、自分がなりたい役割に分かれ（知識及び技能の基礎）、今まで作り上げてきた小道具を使い、本物のように表現しようとするこどもの意欲があり、よりカラオケ屋らしくしようとしたり、日常で起こりうることをイメージし、ごっこ遊びを楽しんでいた。保育者は、こどもたちの遊びの様子を見守り、それぞれの役割の中で、うまくコミュニケーションが取れない時に仲介したり、提案したりして手助けすることで、こどもたち同士で遊びを工夫し、共同的に遊びを進めようとしていた。

③ グループ別に検討した遊びのテーマについて

「イメージの共有と試行錯誤」

「本物志向 リアルを追求」

「安心感 → 作るの楽しい、やりたい気持ち、先生・友だち大好き」

④ 「すこやか」について

困った時に、助けてもらえる保育者がそばにいることや、いつでも使える素材が十分に用意してあり、一人ひとりが自分の実現したいことややってみたいことを、繰り返し試したり工夫したりしていた。「どうしよう」と思った時は、保育者や友だちから提案を受け、遊びを楽しんでいた。こどもたちにとって安心できる場所や人との関係が主体的な学びにつながっていた。



研究紀要

(2) 講師助言まとめ 第3ブロック・南部

実践研修〔公開保育（研究）・実践検討会〕

講師紹介

三重大大学教育学部

富田 昌平 教授



2018年より現職 博士（学校教育学）
津市教育委員会委員、三重県幼児教育センタースーパーバイザー、津市子ども・子育て会議委員、伊賀市子ども・子育て会議委員長など
2019年に第55回日本保育学会保育学文献賞を受賞
著書 『幼児期における空想世界に対する認識の発達』他多数

「主体性」について

主体性が研修のテーマのキーワードになっている。その主体性をどう捉ええるかを考えてみたい。

2015年以降に主体性をテーマにした保育学研究が増えてきた。2017年に要領・指針が改訂され、「主体的で対話的で深い学び」という今後の教育・保育の方向性が示されたことが関係している。

「主体性」とは、「自己の問題を自己の課題として捉えること」（平井、1982）と定義される。つまり、自分の内面をみつめ、対象化することである。ある程度の振り返る力が必要とされる。そのため、「主体性」は、4歳児や5歳児あたりにふさわしい言葉であり、それ以前の年齢においては「自発性」がよりふさわしいように思われる。自発性を発揮させ、主体性につなげていくことが、就学前教育・保育の中で求められている。

「子ども主体」であるとは、子ども中心に、子どもの視点から保育を考えるということである。

大豆生田（2021）は、「子どもにとってどうか」という視点が、保育の質を考える上で基盤となると指摘している。社会背景的には、幼児教育・保育の無償化が進み、公立であれ私立であれ、幼稚園であれ保育園であれ認定こども園であれ、すべての子どもに同じような保育の質を保障していくことがよりいっそう求められる中で、「子どもにとってどうか」という視点が改めて重要視されるようになったと考えられる。

歴史を振り返ると、1989年の改訂前までは、「主体性」という用語は使われてこなかった。しかし、1989年の改訂から、「自主」「自発」を尊重しつつ、「主体」的な活動を目指すことが明記されるようになった。その後の紆余曲折を経て、子どもの主体性を大切にすることは、保育者としての主体性を抑制することではなく、保育者自身も主体性を持ち、互いの主体性を響き合わせながら保育をつくっていくことの大切さが強調されるようになった

（加藤、1993）。さらに近年では、主体性とは、子どもがどのように周囲の人やモノやできごとと関係を持っているのか、「その子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態」（川田、2019）を指す言葉として再定義されて

いる。

モノと向きあう時、子どもはそのモノとのかかわりを通してそれに愛着を持ち、大切にできるようになる。仮にそのモノやできごとが苦手や不安、避けたいような事柄であったとしても、その場に居合わせた人とのかかわりによって、そのモノやできごととの間に新たな関係がつくられ、苦手や不安、回避行動が克服されたり、和らげられたりすることがある。その人やモノやできごとがどうであるかよりも、それとのかかわりこそが大切であり、新たなかかわりを作り出そうとしているとき、子どもは主体的であると言える。ゆえに、一人ひとりの子どもの中に主体性を育てようとする際には、その子どもが周囲の人やモノやできごととどのようにかかわりながら関係を築いているのかという点に、丁寧にかかわっていくことが保育者には求められる。

遊びの充実化について

楠こども園では、本年度新たな保育方法及び内容の改革に着手していた。それは、子どもがやりたいことを自ら選んで、考えて、深める遊びを取り戻したい、そして、チーム保育で保育者の就労継続と質の維持・向上を図りたいという、2つの問題意識からである。

狭い園舎と園庭は、子どもに空間的・時間的な制約という問題を生じさせ、園児数の多さは、遊びの選択肢の相対的な少なさという問題を生じさせ、さらに保育室と園庭の往来という遊びの動線の少なさ、遊びの多種多様性の欠如という問題を生じさせていた。そこで具体的には、4・5歳児4クラスの保育室の「各クラスの保育室」という固定概念を取り払い、各保育室をそれぞれに特徴を持った自由な遊びの部屋として作り変え、子どもたちがそこを自由に行き交えるようにした。園庭も固定された時間に固定されたクラスが利用するのではなく、自由な遊びの時間にどの子も自由に利用できるようにした。併せて保育者も「各クラスの担任」という固定概念を取り払い、互いに連携を密にしながらそれぞれに決められた遊びの場所で子どもの遊びを援助するという方式に変えていった。このようにして子どもの遊びの充実を図るとともに、保育者の負担軽減と動機づけの高揚を図ろうとしたわけである。まずはこれがうまくいったかどうかは別にして、こうした新たな挑戦への勇気と努力に拍手を送りたい。

本年度は6月と11月と本日の3回、楠こども園の保育を見させてもらった。6月に訪問した際には、まだ新たな改革に着手したばかりの時期であり、それぞれの遊びの空間も魅力的なものとなりえていなかった。やりたいことを自ら選んで遊ぶという点に関しても、選び切れずにフラフラしている子どもが数人いて、このフラフラしていることをネガティブに捉えるのではなく、周囲の人やモノやできごととかかわり、新たな関係を作り出していくまでの大切な時間として捉え直して、フラフラを保障するような居場所づくりと援助が必要ではないかと助言させてもらった。

本日の公開保育では、保育室は「にこにこ」「きらきら」「ふわふわ」「はろー」の4つに分かれていた。にこにこルームでは、病院ごっこ、劇ごっこ、ショーごっこ、製作遊び、折り紙、ウレタン積み木を使ったお家ごっこなどが見られ、きらきらルームでは、木製積み木を使ったお家ごっこ、街づくり、製作遊び、お店屋さんごっこなどが見られた。これらはいわば「挑戦」への要求を満たしてくれる空間である。他方、ふわふわルームでは、粘土、ブロック、ラキュー、レゴ、ビー玉転がし、コマ回し、あやと

り、絵本など、それぞれに好きな玩具が用意され、はろールームでは、特定の遊びというよりも、ただぼーっと静かに過ごせる空間が用意されていた。これらはいわば「安心」への要求を満たしてくれる空間である。子どもたちは安心と挑戦をバランスよく経験しながら、やがては自ら遊びを選んで、考えて、深めることのできるような仕掛けになっていたと思われる。

また、にこにこルームやきらきらルームを見ていると、同じ空間の中でも、1人で道具をつくる、絵を描く、場を設定するなど、単独での目標やイメージに向かって取り組んでいる子どももいれば、2～3人でお店の人をやる、つくった車を走らせる、いっしょの衣装を着てなりきるなど、少人数での目標やイメージに向かって取り組んでいる子ども、あるいは、4～5人以上でお店屋さんごっこ、街づくり、劇ごっこ、ショーごっこ、病院ごっこをするなど、大人数での目標やイメージに向かって取り組んでいる子どもなどがいた。しかし、それぞれがまったく交わることなく別々に好きな遊びに取り組んでいるというわけではなく、互いに意識し合い交流し合いながら展開していた。

大人数での大きな物語に身を置きながら、一方で「ぼく、これつくるんだ」と小さな物語に身を置き、かと思えば2人組の中くらいの物語にもかかわっていた。遊びの裾野や懐が広く深いことで、ぼーっとしていても許される時間や空間も保障され、それが安心感や居場所感にもつながっているように見えた。そして、保育者の役割としては、いろんな水準の「物語」を支える環境構成とその準備、子どもたちそれぞれの目標やイメージを瞬時に感じ取りながらの援助という点に、その真価を見ることができた。

遊び観について

四日市市に限らず、今ではどの保育の現場に行っても、「子どもの遊びが幼くなった」「長続きしなくなった」という声をよく耳にする。遊びが「点」ばかりで、「線」になっていないのである。一方で遊びが「線」になると、今度は「大人がかかわり過ぎたからではないか?」「まとめようとし過ぎではないか?」「大人がいないと成立しないのではないか?」とそれはそれで心配になる。「線」もまた、クラスに1つしかない「単線」だと入れない子も出てくる。だから、いろんな線があってどの子どもでもどこかに入れそうな「複線」を目指す。しかし、そうすると複数ある線のそれぞれで子どもが満足して、互いにつながりがなく、全体としての一体感や熱狂の渦のようなものが生じない。ゆえに今度は、複線の「横系」だけでなく、「縦系と横系」とが豊かにつながった、そうした遊びを目指していく。本年度の楠こども園での取り組みは、まさに「点」を「線」に、「単線」を「複線」に、「横系」を「縦系と横系」という、遊びの充実化を目指した果てしない道のりであったと言える。

一方で、子どもの遊びや主体性といった問題があまりにも大人の側だけで語られ過ぎると、別の懸念も生じてくることも指摘しておきたい。つまり、目標達成やマジメさといった大人に特有の論理によって、子どもの遊びや主体性の問題がからめとられていくことへの懸念である。加用（2012）は、現代の大人たちが持つ遊び観のよくない特徴として、①達成化傾向（何かをやり始めたら何かを達成したくなる傾向）、②獲得化傾向（遊びを通して何かを獲得する（学ぶ）ことを重視する傾向）、③上品化傾向（遊びでのかかわり方や遊び方、遊びを通して経験する感情などに関して「きれいさ」を求め

る。しかし、子どもの遊びを見ていると、それはしばしば流動的で、目的もころころと変わることがあるし、本人にしかまったく意味を持たないような、くだらない遊びにしばしば興じるし、達成の喜びや楽しさばかりでなく、悔しさや悲しさ、怖さといったネガティブな感情もしばしば味わうものである。そして、そうしたいくつもの側面を持つことが子どもの遊びの良さである。子どものズッコケるような、くだらないけど面白い話が保育者にとって仕事の原動力となり、ひいては遊びの充実化につながっていくということもまた、かつてはよくあった話である。研修の場において、このような多様な子どもの姿について語り合いながら、肩の力を抜くということも一方であってもよいのではないだろうか。

最後に、楠こども園では、本年度の取り組みを通じて、子どもたちの遊びには変化が見られ、自らすすんで、選んで、考えて、つながって、深めるようになったと言える。子どもの主体性は確かに育ってきていると言えるのではなかろうか。子どもの主体性を育てるためには、保育者もまた主体性を持つことが大事であるが、楠こども園では、子どもの思いを聞き取りつつ、保育者の思いもていねいに返すことができていた。今回の新たなチャレンジのなかで、困難も多くあったと思うが、失敗や試行錯誤を重ねながら数多く話し合ってきたことで、保育者の主体性も確かに育ってきていると感じることができた。

V 研究の成果

I 「こどもの姿環境・保育者のかかわりから遊びの展開を読み解く」

実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕第1ブロック・北部(以下第1という)、第2ブロック・中部(以下第2という)、第3ブロック・南部(以下第3という)の各ブロックにおいて、アンケート結果を集計し、研修参加者が注目したこどもの遊びごとに小グループに分かれ、グループ討議を行い、子どもの遊びと姿を出しあい、環境と保育者のかかわりについて明らかにしていった。

そこでは、こどものやってみたい遊びを十分楽しむための保育者との関係性が浮かんできた。アンケート回答結果の傾向にも見られるが、こどもの遊びが始まる時、保育者の受容や共感が、遊びをつくり出すこどものエネルギーになっている。また、遊びが広がり始め、イメージを発揮しようとする時、こどもが不安を感じたり、困ったりしても、そばにいつも見守ってくれている保育者が一緒に遊んでいることが、こどもにとっての安心感を生み、遊びを試したり、考えだしたりする姿となり、遊びの発展につながっていった。

第1での5歳児の「泥だんごづくり」では、何回も保育者と共にだんご作りをしてきているこどもの遊びの過程を想像させるような、こども同士のやり取りがあった。遊びが発展してきた。今は、保育者が見守っていることで、こどもが困ったことを支えてもらい、こども自身がどうしようかと考え、自発的な姿を発揮していた。また、保育者も共に、泥だんごを作り込む仲間として、相談しあう関係性であることが遊びを充実させていっていると感じられた。

第2の4歳児の「おしの遊び」では、こどもも保育者も共に遊びを楽しみ、虫になりきって遊ぶ姿の背景に、様々な環境の工夫があった。室内には、虫の観察にかかわる図鑑や写真の掲示や実物が観察ケースや手作りのケースに入っていた。また、虫を作るための素材が豊富に用意され、道具もこどもが工夫できるものが多種多様に用意されていた。そこで、こどもたちは、自分の思いついたことやイメージを表現しようと作ることに集中し、どうやって作ろうかと困った時には、そばにいる保育者や友だちが気かけ、一緒に考え、作る姿につながっていった。また、こども一人ひとりのイメージが身近な共通体験をもとに作ったもので表現し設定されることで、保育者を仲介として、虫を捕まえたり、逃げたり遊びになり、自分たちの体験を交え、発展していくおもしろさを感じていることが読み取れた。

第3のきらきらルームの遊びのカラオケ屋でのより本物に近づけようとするこどもの姿は、実体験をどのように遊びで表現しようかと試行錯誤し、没頭する姿があった。遊びを繰り返し、友だちとやり取りを楽しみ、思い浮かんだことをやってみたいと保育者や友だちと共同的に作り上げていく姿があり、保育者の提案や情報の提供がこどもの興味・関心を引き出し、次の遊びへつなげていくことの土台となっていた。

保育者のかかわりと環境に対するこどもの姿を捉え整理していくことで、こどもの遊びをどのように充実させていけばよいかを今後も明らかにしていく。

2 「すこやか・つながり・まなびのめばえの視点でこどもの遊びを考える」

「すこやか」	安全で、安心した環境のもと、しなやかな心と体を育てます。
	生活や遊びを通し、思う存分体を動かし、様々な経験を重ね、自立心と自律性を育みます。
	興味・関心を広げ、試したり、繰り返したりし、体を動かすことを楽しみます。
「つながり」	人から愛され、自分を大事にし、互いに認めあう心を育てます。
	友だちと一緒に遊び、いろいろな気持ちを共有し、人とかかわることの心地よさを味わいます。
	自分の思いを表現し、友だちの思いを知り、調整することで、周りの人との関係性を築いていく心を育てます。
「まなびのめばえ」	夢中になって遊び、達成感や充実感、自分を表現する喜びを味わう中で、思考力や想像力、探究心を育てます。
	様々なことに興味をもち、遊びを楽しむことで、好奇心や探究心、学びへの基盤を育てます。
	遊びを通して、やりたいと思ったことをやりきったり、自分で考えたことを試してみたりし、面白さや楽しさを味わいます。

「四日市市就学前教育・保育カリキュラムより」

実践研修〔公開保育(研究)・実践検討会〕第1では「まなびのめばえ」第2では「つながり」第3では「すこやか」にそれぞれ焦点をあて、グループワークを実施した。

「すこやか」については、「『安心と挑戦の循環』を通してこどものウェルビーイングを高める幼児期までのこどもの育ちのビジョン」(*3)でうたわれているように、四日市市就学前教育・保育カリキュラムの視点である「すこやか」は、こどもにとっての安心感を育てる視点であり、様々な遊びを見つける、楽しむために、どこにいても安心できる場所や人があることとつながっている。グループワークでは、保育者のかかわりにおいて、提案や仲間としてのかかわりを評価する意見が多数であった。第3の「なりきりごっこ」では、チョウチョやザリガニになりきり、保育者の言葉がけに応じ、イメージを浮かべて表現していた。こどもがどうしようと困っている時、考えを巡らせている時、助けてほしいと不安に思っている時、そばで一緒に遊んでいた保育者が、こどもの姿に寄り添い、言葉をかけたり、手助けしたりしていくことで、遊びが続いていったと考えられる。

「つながり」については、公開保育実施園と助言者との園内研修でのやり取りから、「つながり」を保育の実践の場で、どのように意識していくかが問われた。遊びが充実する過程で、保育者が「何と何をどうつなげるか」、こどもが「何とどうつながるか」その過程へのかかわりを振り返り、こどもの育ちを捉えていくことが大事である。第2の「けいさつごっこ」では、園

周辺に出かけ、地域の人から聞き取ることで、子ども同士がイメージの共有を深め、試行錯誤したり、工夫したりし、自分たちの遊びを実現させようとする姿が、つながりの概念を改めて問い直すこととなった。

「まなびのめばえ」については、グループワークにおいて、「意欲的に遊んでいる姿」への発言が多く、社会情動的スキル（※4）がこどもの遊びを充実させ、発展させ、遊びが楽しくなり、遊びから学びの芽生えが育っていることを討議した。第1の「ハンバーガー屋さん」では、保育者の「この遊びをこどもたちと一緒に楽しみたい」という思いが環境や保育者の言葉がけに表われていた。「遊びたい」とのこどもの思いを土台にして、「好奇心が芽生える環境」や「探究心をくすぐる環境」、「様々な物事を考え、情報を得ることができる環境」とのかかわりが、こどもの学びの姿につながっていていることが明らかとなった。

3 「3つの資質・能力から遊びのプロセスを考える」

認定こども園教育・保育要領には、「第1章3(1)幼保連携型認定こども園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の1に示す幼保連携型認定こども園の教育及び保育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。ア 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」イ 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」ウ 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」(2) (1)に示す資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。」とある。今回、こどもの遊びやそこに至る過程を見合い、実践をドキュメンテーション化しながら読み取れたことを討議した。3つの資質・能力のつながりを検討し、資質・能力を一体的に育てていることを確認した。実践検討会参加者一人ひとりにとっても明日からの保育実践に活かすことのできるものとなった。3つの資質・能力を育むことは、遊び込むことによって育まれる。「やってみたい」を積み重ね、遊びの発展、深まりをとことん追求することが大切である。

「幼児の自発的な活動としての遊びを通した学びは、客観的・抽象的な認識や思考が、発達していくことになる小学校以降の生活や学習の基盤となり、ひいては言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力の基礎を培う重要なものである。なお、幼児からすると、遊ぶことそのものが楽しくて夢中になるのであり、その豊かな遊びの展開の結果として様々な資質・能力が育まれることに留意が必要である。」（※5）とあるように3つの資質・能力の「学びに向かう力・人間性」「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」一つ一つを読み解くと小学校以降の教育につながっていることを学んだ。

また、それぞれのブロックの実践検討会から、こどもが「やってみたい」と思えるものや人やコトが存在し、主体的なこどもの姿が発揮されることが明らかになった。それは、園庭に広がる砂や土であったり、様々な素材であったりする。また、保育者のこどもが安心できる手助けであったり、主体の言葉がけであったりする。そして、こどもを中心とした遊びが楽しい、充実していると実感できる体験が3つの資質・能力を育てることを、保育者一人ひとりがより一層意識する必要性も明らかとなった。

VI 課題と展望

実践研修「公開保育(研究)・実践検討会」は、四日市市の就学前施設が保育を公開しあい、同じ専門性をもつ保育者として意見を交わすことや、小学校・中学校教育関係者の参加のもと、就学前教育・保育の学びを小学校以降の学びにつなげていくための意見交流の場としていくことを展望している。

昨年度より、「効果的な研修の一つとしては、参加者が課題意識をもって研修に取り組み、実践と省察を繰り返しながら新たな気づきが得られるよう、研修と教育実践の往還を繰り返す研修の実施に向けた動きがみられる。幼児が主体的に遊ぶ姿や学びの過程といった実践事例のエピソードを持ち寄ってドキュメンテーションやポートフォリオ等も活用しつつ『対話』することを重視した研修や、日常的に保育を見せ合うことなどにより、日々の教育実践や園内研修の質を高め、ひいては地域の幼児教育の質の向上を図っていくことが期待されている。」(※5)とあるように、公開保育実施園と共に、研究が進められるよう当センターアドバイザーが訪問を繰り返し、保育観察及び公開実施園に応じた園内研修でのワークショップを重ねてきた。公開保育実施園の協力のもと、当センター主催の実践研修で、様々な情報や学びを整理し、実施することができた。その過程において、大事なものは、こども同士・こどもと保育者・保護者と保育者・保育者同士、園全体で互いに高め合う肯定的な関係性を築くことだと実感した。

また、「設置者や施設類型を問わず、幼児期及び幼保小接続期の教育の充実のための取組を一体的に推進することが重要である。幼保小において、相互に教育実践を見合ったり合同研修を行ったりすることや架け橋期(5歳児から小学校1年生の2年間)のカリキュラムの策定等を進め、育みたい資質・能力や遊び・学びのプロセス、教育活動について相互理解を図り、幼児教育及び小学校教育の充実並びに幼保小の円滑な接続を図ることが必要である。」(※5)とあり、今年度は昨年度よりさらに施設の種別を超えた参加者、学校関係者の参加があり、多様な意見をワークショップを通して、交流することができた。「遊びの中の学び」を言語化する文化は、幼児教育・保育の独自性を維持したまま小学校教育と接続を図る上でも重要な要素である。保育者一人ひとりが学び続ける保育者としての自己を認識し、自身の実践を省察することで、質の高い教育・保育実践を目指した創意工夫が行われ続ける。保育者が「もっと学びたい」という意欲をもち、学びあいながら、自らの教育・保育を見直し続けるプロセスがあってこそ、質的向上が達成され则认为る。

今後も、公開保育実施園の地域や実情に応じた当センターの支援や研修の方法を発展させ、研究の視点などを検討し、こどもの育ちにかかわる保育者、学校関係者がつながり、四日市市全体の就学前教育・保育の質の向上を担う人材づくりにもつなげていけるようにしていきたい。

引用について

- ＊１ 令和５年度において、「四日市市幼児教育・保育研究協議会」にて社会状況を見据え「こどもの権利」を中心に、就学前教育・保育の在り方に対して、忌憚のない意見を交流しあい、こどもたちの未来を展望し、協議し策定された。これからの時代に求められる力を確実に身に付け、こどもたち一人ひとりのもつ可能性を最大限に伸ばす教育・保育の実現に向けて、共に歩んでいくために活用していくカリキュラムを言う

- ＊２ 「関係からはじまる―社会構成主義がひらく人間観」
ケネス・Ｊ・ガーゲン（著）鮫島輝美（翻訳）、東村知子（翻訳）
ナカニシヤ出版

- ＊３ 幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン 令和５年12月23日より

- ＊４ 2015年に出されたOECD（経済協力開発機構）ワーキングペーパーでは、学力やIQを意味する認知能力と対比される非認知能力を「社会情動的スキル」と定義し、「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」の3つの側面から捉えている

- ＊５ 今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会最終報告 令和６年10月より

研究助言者

岐阜聖徳学園大学教育学部
桜花学園大学教育保育学部
三重大学教育学部

西川 正晃 教授
上村 晶 教授
富田 昌平 教授

令和6年度

四日市市幼児教育センター研究紀要

第2集

遊びがこどもたちの未来をつくる

令和7年5月発行

四日市市幼児教育センター

〒510-0025 四日市市東新町26-32

T E L 059-333-6002 F A X 059-333-6003



四日市市幼児教育センター